

六號室

アントン・チェホフ Anton Chekhov

瀬沼夏葉訳

青空文庫

(一)

町立病院の庭の内、牛蒡、蓐草、野麻などの簇り茂つ
 ちやうりつびやうあん にはうち ござう
 てる邊に、小やかなる別室の一棟がある。屋根のブリキ板は錆
 あたり ささ
 びて、烟突は半破れ、玄關の階段は紛聖が剥がれて、
 えんとつ なかばは げんくわん かいだん しつくひ は
 朽ちて、雑草さへのびくと。正 面は本院に向ひ、後
 く さつさう しょうめん ほんいん むか こうは
 方は茫 廣とした野良に臨んで、釘を立てた鼠 色の塀が
 う ひろ／＼ のらの のぞ くい た ねずみいろ へい
 とりまは 取繞されてゐる。此の尖端を上に向けてゐる釘と、塀、さて
 またこ べつしつ この せんたん うへ む くい へい
 は又此の別室、こは露西亞に於て、たゞ病院と、監獄と
 にのみ見る、儚き、哀な、寂しい建物。
 み はかな あはれ さび たてもの

尋草いらぐさに掩おほはれたる細道ほそみちを行ゆけば直すぐ別室べつしつの入口いりぐちの戸とで、戸とを開ひらけば玄關げんくわんである。壁際かべぎはや、暖爐だんろの周邊まはりには病院びやうあんのさま／＼の雜具がらくた、古寐臺ふるねだい、汚よごれた病院服びやうあんふく、ぼろ／＼ツボンした、青い縞あをしまの洗浚あらひざらしのシャツ、破やぶれた古靴ふるぐつと云いつたやうな物ものが、ごたくさと、山やまのやうに積つみ重かさねられて、惡臭あくしうを放はなつてゐる。

此この積つみ上げられたる雜具がらくたの上に、毎いでも烟管きせるを嚙くはへて寐ねつてゐるのは、年としを取とつた兵隊へいたい上あがりの、色いろの褪さめた徽章きしやうの附ついてる軍服ぐんぷくを始終ふだん着てゐるニキタと云いふ小使こづかひ。眼めに掩おほひ被かぶさつてゐる眉まゆは山羊やぎのやうで、赤あかい鼻はなの佛頂面ぶつちやうづら、脊せは高たかくはないが瘠やせて節塊ふしくれだ立つて、何處どこにか恚かう一癖くせありさうな男をとこ。彼かれは極きはめ

かくたくな^なに、何^{なん}よりも秩序^{ちつじよ}と云^いふことを大切^{たいせつ}に思^{おも}つてゐて、自分^{じぶん}
 の職務^{しよくむ}を遣^やり終^{おほ}せるには、何^{なん}でも其^{その}鐵拳^{てつけん}を以^{もつ}て、相手^{あいて}の顔^{かほ}だ
 らうが、頭^{あたま}だらうが、胸^{むね}だらうが、手^て當^{あたり}放^{はう}題^{だい}に毆^{なぐ}打^うらなけれ
 ばならぬものと信^{しん}じてゐる、所謂^{いはゆる}思慮^{しりよ}の廻^まはらぬ人間^{にんげん}。
 玄關^{げんくわん}の先^{さき}は此^この別室^{べつしつ}全體^{ぜんたい}を占^しめてゐる廣^{ひろ}い間^ま、是^{これ}が六
 號室^{がうしつ}である。淺黄^{あさぎいろ}色のペンキ塗^{ぬり}の壁^{かべ}は汚^{よご}れて、天^{てん}井^じは燻^{くすぶ}
 つてゐる。冬^{ふゆ}に暖爐^{だんろ}が烟^{けぶ}つて炭氣^{たんき}に罩^こめられたものと見^みえる。窓^{まど}
 は内側^{うちがは}から見^み惡^{にく}く鐵格子^{てつがうし}を嵌^はめられ、床^{ゆか}は白^{しろ}ちやけて、そゝ
 くれ立^だつてゐる。漬^つけた玉菜^{たまな}や、ランプの燻^{いぶり}や、南京蟲^{なんきんむし}や、ア
 ンモニヤの臭^{におひ}が混^{こん}じて、入^{はい}つた初め^{はじ}の一分時^{ぷんじ}は、動物園^{どうぶつえん}にでも
 行^いつたかのやうな感覺^{かんかく}を惹^{ひき}起^{おこ}すので。

室内しつないには螺旋ねぢで床ゆかに止められた寢臺ねだいが數すう脚きやく。其上そのうへには
あをあを びやうめんびやうめんふく 青い病院服きを着て、昔むかし風ふうに頭巾づきんを被かぶつてゐる患者等くわんじやらが
すわ 坐すわつたり、寐ねたりして、是これは皆瘋癲患者みんかうてんくわんじやなのである。患くわんじ
者やの數すうは五人にん、其中そのうちにて一人丈ひとりだけは身分みぶんのある者であるが他た
は皆卑みぢやしい身分みぶんの者計ものばかり。戸口とぐちから第一だいの者は、瘡やせて脊せの高たか
い、栗色くりいろに光ひかる鬚ひげの、眼めを始終泣腫しじゆうみらしてゐる發狂はつきやうの中ちゆう
風患者ふうわ者、頭あたまを支さへて凝ぢつと坐すわつて、一つ所ところを噴みめながら、晝夜ちゆうや
も別わかず泣なき悲かなしんで、頭あたまを振り太息といきを洩もらし、時ときには苦笑にがわらひをし
たりして。周邊あたりの話はなしには稀まれに立入たちいるのみで、質問しつもんをされたら決けつ
して返答へんたふを爲したことの無い、食くふ物ものも、飲のむ物ものも、與あたへらるゝ
まゝに、時々とき／＼苦しせきさうな咳せきをする。其そのほ頬ほの紅べに色いろや、瘡やせか

方で察するに彼にはもう肺病の初期が萌ざしてゐるのであらう。

其に續いては小體な、元氣な、※鬚の尖つた、髪の毛の黒いネグルの人のやうに縮れた、些しも落着かぬ老人。彼は晝には室内を窓から窓に往來し、或はトルコ風に寢臺に趺を坐いて、山雀のやうに止め度もなく囀り、小聲で歌ひ、ヒ、ヒ、ヒと頓興に笑ひ出したり爲てゐるが、夜に祈祷をする時でも、猶且元氣で、子供どものやうに愉快さうにぴん／＼してゐる。拳で胸を打つて祈るかと思へば、直に指で戸の穴を穿つたりしてゐる。是は猶太人のモイセイカと云ふ者で、二十年計り前、自分が所有の帽子製造場いざうばが焼けた時に、發狂したのであつた。

六號室がうしつの中で此このモイセイカ計ばかりは、庭にはにでも町まちにでも自由じいうに外出でるのを許ゆるされてゐた。其それは彼かれが古ふるくから病院びやういんにある爲ためか、町まちで子供等こどもらや、犬いぬに圍かこまれてゐても、決けつして他たに何等なんらの害がいをくは、加くへぬと云いふ事ことを町まちの人ひとに知しられてゐる爲ためか、左ひだりに右みぎ、彼かれは町まちの名物男めいぶつをとことして、一人ひとり此この特權とくけんを得えてゐたのである。彼かれは町まちを廻まわるに病院服びやういんふくの儘まま、妙めうな頭巾づきんを被かぶり、上靴うはぐつを穿はいてる時ときもあり、或あるは跣足はだしでツボン下したも穿はかずに歩あるいてゐる時ときもある。さうさうひとかどみせさき店前みせさきに立たつては一錢せんづつを請こふ。或家あるへではクワスを飲のませ、或所あるころではパンを食くはして呉くれる。で、彼かれは毎いつも満ま腹ふくで、金持かねもちになつて、六號室がうしつに歸かへつて來くる。が、其その携たづさへ歸かへところものは、玄關げんくわんでニキタに皆奪みんなばはれて了しまふ。兵隊上り

のこづかひ小使のニキタはらんばう亂暴にも、かくし隠をいちく一々ひつくりか轉覆へして、す悉皆つかりとりか取返へしてしま了ふので有あつた。

又またモイセイ力はどうしつ同室の者にも至いたつてしんせつ親切で、みづ水を持もつて來きて遣やり、ねとき寐る時にはふとん布團を掛かけて遣やりして、まち町から一錢せんづつ貰もらつて來きて遣やるとか、めいくあた各に新しい帽子ぼうしを縫ぬつて遣やるとかと云いふ。ひだり左の方はうの中風患者ちゆうぶくわんじやにはしぎゆきじ始終匙でもつてしよくじ食事しょくじをさせる。彼かれがか慥しやうくするのべつだんは、別段どうじやう同情たみぎとなりからいでもなく、と云いつて、或ある情誼じやうぎからするのたみぎとなりでもなく、唯右ひとの隣なりにあるグロモフと云いふ人ひとに習ならつて、自然しぜん其眞似そのまねをするので有あつた。

イワン、デミトリチ、グロモフはさい三十三歳で、彼かれはこのしつ此室でのみぶん身分の可いいもの、元來もとはさいばんしよ裁判所けいりの警吏またけんちやう、又また縣廳けんちやうの書記しよきをも

つと務めたので。彼は人かれひとが自分じぶんを窘きん逐ちくすると云いふ事ことを苦くにしてゐる
 ふうてんくわんじや、常つねに寐臺ねだいの上うへに丸まるくなつて寐ねてゐたり、或あるは運うん
 瘋癲患者ふうてんくわんじや、室へやを隅すみから隅すみへと歩いて見みたり、坐すわつてゐ
 動うの爲ためかのやうに、
 事ことは殆ほとんど稀まれで、始終興奮しじゆうこうふんして、燥氣いらくして、暖あまい※まいなある待まつ
 ことことで氣きが張はつてゐる様子やうす。玄關げんくわんの方はうで微かすかな音おとでもするか、
 庭にはで聲こゑでも聞きこえるかすると、直すぐに頭あたまを持もち上げて耳みみを欹そばてる。
 誰だれか自分じぶんの所ところに來きたのでは無ないか、自分じぶんを尋たづねてゐるのでは無ない
 かと思おもつて、顔かほには謂いふべからざる不安ふあんの色いろが顯あらはれる。さなき
 だに彼かれの憔悴せうすゐした顔かほは不幸ふかうなる内心ないしんの煩悶はんもんと、長日ちやうじつ月げつ
 の恐怖きようふとにて、苛責さいなまれ※ぬいた心こゝろを、鏡かゞみに寫うつしたやうに現あらはし
 てゐるのに。其その廣ひろい骨張ほねばつた顔かほの動うごきは、如何いかにも變へんで病びやう

的きで有あつて。然しかし心の苦痛くつうにて彼の顔かほに印いんせられた緻密ちみつな徴ちよう
 候こうは、一見けんして智慧ちゑありさうな、教育けういくありさうな風ふうに思おもはし
 めた。而さうして其眼そのめには暖あたな健全けんぜんな輝かががある、彼はニキタを除のぞく
 の外ほかは、誰たれに對たいしても親切しんせつで、同どう情じやうが有あつて、謙遜けんそんであ
 った。同室どうしつで誰だれか、釦釦ぼたんを落おしたとか匙さじを落おしたとか云いふ場合
 には、彼かれが先まづ寐臺ねだいから起おき上あつて、取とつて遣やる。毎まい朝あさ起おきると同
 室うしつの者等ものらにお早はやうと云いひ、晚ばんには又またお休息やすみなさいと挨あい拶さつもす
 る。

彼の發狂はつきやう者しやらしい所ところは、始終しじう氣きの張はつた様子やうすと、變へんな眼付めつき
 とをするの外ほかに、時折ときをり、晚ばんになると、着きてゐる病院服びやういんふくの前まへ
 を神經しんけい的に搔合かきあはせると思おもふと、齒はの根ねも合あはぬまでに全身ぜんしん

を顫^{ふる}はし、隅^{すみ}から隅^{すみ}へと急^{いそ}いで歩^{あゆ}み初^{はじ}める、丁^{ちやうど}度^ど激^{げき}しい熱^{ねつ}、
 病^うにでも俄^{にはか}に襲^{おそ}はれたやう。と、施^{やが}て立^{たちとゞ}留^まつて室^{しつ}内^{ない}の人^{ひと}
 々々^{／＼}を睥^{みまは}して昂^{かう}然^{ぜん}として今^{いま}にも何^{なに}か重^{ぢゆう}大^{だい}な事^{こと}を云^いはんと
 するやうな身^{みがま}構^{かま}へをする。が、又^{また}直^{ぢく}に自^じ分^{ぶん}の云^いふ事^{こと}を聴^きく者^{もの}は無^な
 い、其^その云^いふ事^{こと}が解^{わか}るもの^なは無^ないとでも考^{かん}へ直^{ちか}したか^{なほ}のやうに燥^い
 立^たつて、頭^{あたま}を振^ふりながら又^{また}歩^{ある}き出^だす。然^{しか}るに言^いはうと云^いふ望^{ぞみ}は、
 終^{つひ}に消^きえず忽^{たちまち}にして總^{すべ}の考^{かん}を壓^{あつ}去^{しき}つて、此^{こん}度^どは思^{おも}ふ存^{ぞん}分^{ぶん}、熱^ね
 切^{つせつ}に、夢^{むちゆう}中^{ちゆう}の有^{あり}様^{さま}で、言^{こと}が迸^{ほと}り出^でる。言^いふ所^{ところ}は勿^{もちろん}論^{ろん}、秩^ち
 序^{つじよ}なく、寐^{ねごと}言^ごのやうで、周^{あわて}章^みて見^みたり、途^{とぎ}切^きれて見^みたり、何^{なん}だ
 か意^い味^みの解^{わか}らぬ事^{こと}を言^いふのであるが、何^{どこ}處^こかに又^{また}善^{ぜん}良^{りやう}なる
 性^{せい}質^{しつ}が微^{ほのか}に聞^{きこ}える、其^{その}言^{ことば}の中^{うち}か、聲^{こゑ}の中^{うち}かに、而^{さう}して彼^{かれ}の

瘋癲者たる所も、彼の人格も亦見える。其意味の繋がらぬ、
 辻妻の合はぬ話は、所詮筆にする事は出来ぬのであるが、彼
 の云ふ所を撮んで云へば、人間の卑劣なること、壓制に依り
 て正義の蹂躪されてゐること、後世地上に來るべき善美な
 る生活のこと、自分をして一分毎にも壓制者の殘忍、愚
 鈍を憤らしむる所の、窓の鐵格子のことなどである。云はゞ彼
 は昔も今も全く歌ひ盡されぬ歌を、不順序に、不調和に組立
 るのである。

(二)

いま おほよそ
 今から大凡十三四年以前、此の町の一ばんの大通に、自分
 いへ も
 の家を所有つてゐたグロモフと云ふ、容貌の立派な、金満の
 くわんり
 官吏が有つて、家にはセルゲイ及びイワンと云ふ二人の息子も
 ところ
 ある。所が、長子のセルゲイは丁度大學の四年級になつ
 きふせい
 てから、急性の肺病に罹り死亡して了ふ。是よりグロモフ
 はいへ
 の家には、不幸が引續いて來てセルゲイの葬式の終んだ一週
 うかんめ
 間目、父のグロモフは詐欺と、浪費との件を以て裁判に渡さ
 ま
 れ、間もなく監獄の病院でチブスに罹つて死亡して了つた。
 そのいへ すべて じふぐ
 で、其家と總の什具とは、棄賣に拂はれて、イワン、デミト
 そのいへ おや
 リチと其母親とは遂に無一物の身となつた。
 ち、 ぞんめいちゆう
 父の存命中には、イワン、デミトリチは大學修業の爲

にペテルブルグに住すんで、月々六七十圓えんづゝも仕送しおくりされ、
 何なに不自由ふじゆうなく暮くらしてゐたものが、忽たちまちにして生活くらしは一變へんし、朝あさから
 晩ばんまで、安値あんちよくの報酬ほうしうで學科がくくわを教授けうじゆするとか、筆耕ひつかうを
 するとかと、奔走ほんそうをしたが、其それでも食くふや食くはずの儚はかなき境き
 やうがい。わづかしうにふ、僅わずかな收入しうにふは母はの給養きふやうにも供きせねばならず、彼かれは遂つひに
 此この生せい活くわつには堪たへ切れず、斷然だんぜん大學だいがくを去さつて、古郷こきやうに
 歸かへつた。而さうして程ほどなく或人あるひとの世話せわで郡立ぐんりつ學校がくかうの教師けうしとなつ
 たが、其それも暫時ざんじ、同僚どうれうとは折合をりあはず、生徒せいととは親昵なじまず、此こ
 をも亦辭またじして了しまふ。其その中に母親はゝおやは死ぬしぬ。彼かれは半はん年としも無職むしょく
 で徘徊うろくして唯ただパンと、水みづとで生命いのちを繋つないでゐたのであるが、其そ
 後の裁判所さいばんしょの警吏けいりとなり、病やまひを以もつて後のちに此この職しょくを辭じするまでは、

此に務を取つてゐたのであつた。

彼は學生時代の壯年の頃でも、生得餘り壯健な身體で

は無かつた。顔色は蒼白く、姿は瘠せて、初中終風邪を引

き易い、少食で落々眠られぬ質、一杯の酒にも眼が廻り、

往々ヒステリーが起るのである。人と交際する事は彼は至つて

好んでゐたが、其神經質な、刺激され易い性質なるが故に、

自ら務めて誰とも交際せず、隨て亦親友をも持たぬ。町の人

々の事は彼は毎も輕蔑して、無教育の徒、禽獸的生

活と罵つて、テノルの高聲で燥立つてゐる。彼が物を言ふの

は憤懣の色を以てせざれば、欣喜の色を以て、何事も熱心

に言ふのである。で、其言ふ所は終に一つ事に歸して了ふ。町で

生活せいくわつするのは好このましく無い。社しゃ會かいには高かう尚しやうなる興インテ
 レースレースが無い。社しゃ會かいは暖あまい※な、無意味むいみな生せい活くわつを爲なして居ゐる。
 味あじが無い。壓あつせい制せい、偽ぎ善ぜん、醜しう行かうを逞たくうして、以もつて是これを紛まぎらしてゐる。是こゝ
 壓あつせい制せい、偽ぎ善ぜん、醜しう行かうを逞たくうして、以もつて是これを紛まぎらしてゐる。是こゝ
 におい、か奸物かんぶつ共どもは衣食いしよくに飽あき、正義せいぎの人は衣食いしよくに窮きうする。
 廉れん直ちよくなる方針ほうしんを取る地方ちほうの新聞紙しんぶんし、芝居しばゐ、學がく校かう、公こう
 會演説わいえんぜつ、教育けういくある人間にんげんの團結だんけつ、是等これらは皆必要みなひつえう缺かぐ可べ
 からざるものである。又社また會しゃかい自みづか悟さとつて驚おどろくやうに爲しなけれ
 ばならぬとか抔などとの事ことで。彼かれは其その眼がん中ちゆうに社しゃ會かいの人々ひと／＼
 を唯二種たゞしゆくべつに區別くべつしてゐる、義者ぎしやと、不義者ふぎしやと、而さうして婦人ふじんの事こと、
 戀愛れんあいの事ことに就ついては、毎いも自みづから深ふかく感かんじ入いつて説とくのであるが、
 諸さて自身じしんには未いまだ一度ども戀愛れんあいてふものを味あぢはふた事ことは無ないので。

彼はかれ 愆かくも神經質しんけいしつで、其議論そのぎろんは過激くわげきであつたが、町まちの人
 と／＼は其れそにも拘かゝらず彼かれを愛あいして、ワアニア、と愛嬌あいけうを以もつて
 呼よんでゐた。彼かれが天性てんせいの柔やさしいのと、人ひとに親切しんせつなのと、禮儀れいぎ
 の有あるのと、品行ひんかうの方正ほうせいなのと、着古きふるしたフロツクコート、
 病びやう人にんらしい様子やうす、家庭かていの不遇ふぐう、是等これらは皆總みなすべて人々ひと／＼に温あたき
 どうじやうひきおこを引ひき起おこさしめたのであつた。又また一面めんには彼かれは立派りつぱな教
 育ういくを受け、博學多識はくがくたしきで、何なんでも知しつてゐると町まちの人ひとは言いふ
 てゐる位くらゐで、彼かれは此この町まちの活いきた字引じびきとせられてゐた。
 彼は非ひ常じやうに讀書どくしよを好このんで、屢しばしば《しばしば》俱樂部くらぶに行いつ
 ては、神しん經けい的てきに髭ひげを捻ひねりながら、雜誌ざっしや書物しよもつを手當次第てあたりしだいに
 剥はいでゐる、讀よんでゐるのではなく咀かみ間合まにあはぬので鵜吞うのみにして

るると云ふやうな鹽梅。讀書は彼の病的の習慣で、
 何んでも凡そ手に觸れた所の物は、其れが縱令去年の古新聞
 で有らうが、曆であらうが、一樣に餓えたる者のやうに、屹度手
 に取つて見るのである。家にゐる時も毎も横になつては、猶且、
 書見に耽けつてゐる。

(三)

ある秋の朝のこと、イワン、デミトリチは外套の襟を立て、
 泥濘つてゐる路を、横町、路次と經て、或る町人の家に
 書付を持つて金を取りに行つたのであるが、猶且毎朝のやう

に此この朝あさも氣きが引ひ立たきたず、沈しづんだ調子てうしで或ある横よこ町ちやうに差掛さしかる
 と、折をりから向むかふより二人ふたりの囚人しうじんと四人にんの銃じゆうを負おふて附添つきそふて來く
 へいそつ
 兵卒へいそつとに、ぱつたりと出會でつくわす。彼かれは何時いつが日も囚人しうじんに出でつく
 會わせば、同どう情じやうと不愉快ふゆくわいの感かんに打うたれるのであるが、其日そのひ
 は又また奈何どうい云いふものか、何なんとも云いはれぬ一種しゆの不好いな感かん覺かくが、常つね
 にもあらずむら／＼と湧わいて、自分じぶんも恚かく枷かせを箝はめられて、同じ
 すがぬかるみなかひ
 姿すがたに泥濘ぬいじやうの中なかを引ひかれて、獄ごくに入いられはせぬかと、遽にはかに思おもはれて
 ぞつ
 慄然ぞつとした。其それから町ちやう人にんの家いへよりの歸途かへり、郵便局いうびんきよくの側そば
 で、豫かねて懇意こんいな一人ひとりの警部けいぶに出遇であつたが警部けいぶは彼かれに握手あくしゆして數
 うほばかともある
 歩計ふけいり共に歩あるいた。すると、何だなんか是これが又彼またかれには只事ただごとでなく
 怪あやしく思おもはれて、家いへに歸かへつてからも一日いちにち中ぢゆう、彼の頭かれあたまから囚しうじ

人の姿、銃を負ふて兵卒の顔などが離れずに、眼前に閃
 付いてゐる、此の理由の解らぬ煩悶が怪しくも絶えず彼の心を
 攪亂して、書物を讀むにも、考ふるにも、邪魔をする。彼は
 夜になつても燈をも點けず、夜すがら眠らず、今にも自分が捕縛
 され、獄に繋がれはせぬかと唯其計りを思ひ悩んでゐるのであ
 つた。

然し無論、彼は自身に何の罪もなきこと、又將來に於ても
 殺人、窃盜、放火などの犯罪は斷じて爲ぬとは知つてゐ
 るが、又獨つ／＼と慥うも思ふたのであつた。故意ならず犯
 罪を爲すことが無いとも云はれぬ、人の讒言、裁判の間
 違などは有り得べからざる事だとは云はれぬ、抑も裁判の間

違^{がひ}は、今日^{こんにち}の裁判^{さいばん}の状^{じやう}態^{たい}にては、最も^{もつと}有^あり有^うべき事^{こと}な
 ので、總^{そう}じて他人^{たにん}の艱難^{かんなん}に對^{たい}しては、事務^{じむ}上^{じやう}、職務^{しよくむじやう}上^{じやう}の
 關^{くわん}係^{けい}を有^もつてゐる人^{ひと}々、例^{たと}へば裁判^{さいばん}官^{くわん}、警^{けい}官^{くわん}、
 醫師^{いし}、とかと云^いふものは、年月^{ねんげつ}の經^{けい}過^{くわ}すると共に、習^{しふ}慣^{くわん}
 に依^よつて遂^{つい}には其^{その}相^{あい}手^ての被^ひ告^{こく}、或^{ある}は患^{くわん}者^{じや}に對^{たい}して、單^{たん}に形^{けい}
 いしきいじやう關^{くわん}係^{けい}を有^もたぬやうに望^{のぞ}んでも出^で來^きぬやうに、此^こ
 式^{しき}以^い上^{じやう}の關^{くわん}係^{けい}を有^もたぬやうに望^{のぞ}んでも出^で來^きぬやうに、此^こ
 の習^{しふ}慣^{くわん}と云^いふ奴^{やつ}がさして了^{しま}ふ、早^{はや}く言^いへば彼^{かれ}等^らは恰^{あだか}も、庭^{には}に
 立^たつて羊^{ひつじ}や、牛^{うし}を屠^{ほふ}り、其^{その}の血^ちには氣^きが着^つかぬ所^{ところ}の劣^{れつ}等^{とう}の人^{にん}
 間^{さん}と少^{すこ}しも選^{えら}ぶ所^{ところ}は無^ないのだ。

翌^{よく}朝^{あさ}イワン、デミトリチは額^{ひたひ}に冷^{ひや}汗^{あせ}をびつしよりと搔^かいて、
 床^{とこ}から吃^{びつくり}驚^{おどろ}して跳^{はね}起^{おき}た。もう今^{いま}にも自^じ分^{ぶん}が捕^ほ縛^{ばく}されると思^{おも}は

れて。而して自ら又深く考へた。慙くまでも昨日の奇しき懊惱が
 自分から離れぬとして見れば、何か譯があるのである、さなくて
 此の忌はしい考が這麼に執念く自分に着纏ふてゐる譯は無いと。
 『や、巡查が徐々と窓の傍を通つて行つた、怪しいぞ、やゝ、
 又誰か二人家の前に立留つてゐる、何故黙つてゐるのだらう
 か？』

これは、是よりしてイワン、デミトリチは日夜を唯煩悶に明し續ける、
 窓の傍を通る者、庭に入る者は皆探偵かと思はれる。正午にな
 ると毎日警察署長が、町盡頭の自分の邸から警察へ行
 くので、此の家の前を二頭馬車で通る、するとイワン、デミト
 リチは其度毎、馬車が餘り早く通り過ぎたやうだとか、署

長の顔付が別で有つたとか思つて、何んでも此れは町に重
 大な犯罪が露顯はれたので其れを至急報告するのであらう
 などと極めて、頻りに其れが氣になつてならぬ。

家主の女主人の處に見知らぬ人が來さへすれば其れも苦に
 なる。門の呼鈴が鳴る度に惴々しては顫上る。巡查や、
 憲兵に遇ひでもすると故と平氣を粧ふとして、微笑して見たり、
 口笛を吹いて見たりする。如何なる晩でも彼は拘引されるの
 を待ち構へてゐぬ時とは無い。其れが爲に終夜眠られぬ。が、
 もし這麼事を女主人にでも嗅付けられたら、何か良心に
 咎められる事があると思はれやう、那樣疑でも起されたら大
 變と、彼はさう思つて無理に毎晩眠た振をして、大駢を

さへ發かいてゐる。然しかし這麼こんな心遣こころづかひは事實じじつに於おいても、普通ふつうの論理ろんり
 に於おいても考かんがへて見みれば實じつに愚ばか々々くしい次第しだいで、拘こう引いんされるだの、
 獄舎らうやに繋つながれるなど云いふ事ことは良りやう心しんにさへ疚やましい所ところが無いなら
 ば少すこしも恐おそ怖るるに足たらぬ事こと、這麼こんな事ことを恐おそれるのは精せい神しん病びやうに
 相違さうゐなき事こと、と、彼かれも自みづかおも思おもふて是こゝに至いたらぬのでも無いが、偕さまた又
 考かんがへば考かんがふる程ほど迷まよつて、心しん中ちゆうは愈いよく々々くもん苦悶きもんと、恐きやうふ怖ふとに
 壓あつしられる。で、彼かれももう思慮かんがへる事ことの無益むえきなのを悟さとり、全すつかり然
 失望しつぼうと、恐きやうふ怖ふとの淵ふちに沈しづんで了しまつたのである。
 彼かれは其それより獨居どくきよして人ひとを避さけ初はじめた。職しよく務むを取とるのは前まへ
 にも不い好やであつたが、今いまは猶なほ一層そう不い好やで堪たまらぬ、と云いふのは、人ひと
 が何時いつ自分じぶんを欺だまして、隠かくしにでも密そつと賄賂わいろを突つきこ込みは爲せぬか、其それ

うった
を訴へられでも爲ぬか、或は公書の如きものに詐欺同様の間
ちがひ
違でも爲はせぬか、他人の錢でも無くしたり爲はせぬか。と、
むやみおそろし
無暗に恐くてならぬので。

はる
春になつて雪も次第に解けた或日、墓場の側の崖の邊に、腐爛
した二つの死骸が見付かつた。其れは老婆と、男の子とで、故殺
けいせき
の形跡さへ有るのであつた。町ではもう到る所、此の死骸のこ
とゝ、下手人の噂計り、イワン、デミトリチは自分が殺し
おも
たと思はれは爲ぬかと、又しても氣が氣ではなく、通を歩きなが
さうおも
らも然思はれまいと微笑しながら行つたり、知人に遇ひでもす
ると、青くなり、赤くなりして、那麼弱者共を殺すなどと、
これほどにく
是程憎むべき罪惡は無いなど、云つてゐる。が、其れも此れ

も直に彼を疲勞ちがひらして了しまふ。彼は乃おもふと思ひ着いた、自分の位置ぢぶんのゐち
 の安全あんぜんを計はかるには、女主人の穴藏をんなあるじに隠かくれてゐるのが上じやうさ
 策くと。而して彼は一日中、又一晩中、穴藏の中に立盡たちつく
 し、其翌日も猶且出ぬ。で、身體が甚く凍えて了つたので、詮せ
 方んかたなく、夕方ゆふがたになるのを待つて、こツそりと自分の室へやには忍しの
 び出でて來たものゝ、夜明よあけまで身動みうごきもせず、室の眞中まんなかに立つて
 ゐた。すると明方あけがた、未だ日の出ぬ中、女主人の方ほうへ暖爐造だんろつくり
 の職人しよくにんが來た。イワン、デミトリチは彼等が厨房の暖爐を直なほ
 しに來たのであるのは知しつてゐたのであるが、急きふに何だか然さうで
 は無いやうに思おもはれて來て、是は屹度これきつと警官けいくわんが故わざと暖爐職だんろしよくに
 人の風體ふうていをして來たのであらうと、心は不覺こころそつろ、氣は動顛きどうてんし

て、いきなり卒、室を飛出したが、帽も被らず、フロツクコートも着
 ずに、恐怖に驅られたまゝ、大通を眞一文字に走るのであつ
 た。一匹の犬は吠えながら彼を追ふ。後の方では農夫が叫ぶ。イ
 ワン、デミトリチは兩耳がガンとして、世界中の有ゆる壓
 制が、今彼の直ぐ背後に迫つて、自分を追駈けて來たかのやう
 に思はれた。

彼は捕へられて家に引返されたが、女主人は醫師を招びに
 遣られ、ドクトル、アンドレイ、エヒミチは來て彼を診察した
 のであつた。

而して頭を冷す藥と、桂梅水とを服用するやうにと云つて、
 立歸り際に、もう二度とは來ぬ、人の

氣きの狂くるふ邪魔じやまを爲するにも當あたらないからとさう云いつた。

慙かくてイワン、デミトリチは宿やどを借かりる事ことも、療治れうぢする事ことも、錢ぜに

の無ないので出で來き兼かぬる所ところから、幾いくばく干くもなくして町立病院

に入いれられ、梅毒患者ばいどくびやうくわんじやと同室どうしつする事こととなつた。然しかるに

彼かれは毎晩まいばん眠ねむらずして、我儘わがままを云いつては他ほかの患者等くわんじやらの邪魔じやまを

するので、院長めんちやうのアンドレイ、エヒミチは彼かれを六號室がうしつの別

室しつへ移うつしたのであつた。

一年ねんを經へて、町まちではもうイワン、デミトリチの事ことは忘わすれて了しまつ

た。彼の書物しよもつは女主人をんなあるじが櫥そりの中なかに積重つみかさねて、軒下のきしたに置おい

たのであるが、何處どこからともなく、子供等こどもらが寄よつて來きては、一冊さつ

持ち行ゆき、二冊取去さつとりさり、段々だんくに皆何れみんなづへか消きえて了しまつた。

(四)

イワン、デミトリチの左の方の隣は、猶太人のモイセイカであ
 るが、右の方にある者は、全然意味の無い顔をしてゐる、油切
 つて、眞圓い農夫、疾うから、思慮も、感覺も皆無になつて、
 動きもせぬ大食ひな、不汚極る動物で、始終鼻を突くやうな、
 胸の悪くなる臭氣を放つてゐる。
 彼の身の周りを掃除するニキタは、其度に例の鐵拳を振つ
 ては、力の限り彼を打つのであるが、此の鈍き動物は、音をも
 立てず、動きをもせず、眼の色にも何の感じをも現はさぬ。唯重

い樽たるのやうに、少しすこ踰よろけ踰けるのは見るみのも氣味きみが悪い位わるくらゐ。

六號がうしつ室だいの第五番目ばんめは、元來もと郵便局いうびんきよくとやうに勤つとめた男をとこで、

氣きの善いいやうな、少しすこ狡猾ずるいやうな、脊せの低ひくい、瘡やせたブロンヂ

ンの、利發りかうらしい瞭然はつきりとした愉快ゆくわいな眼付めつき、些ちと見みると恰まるで正

氣やうきのやうである。彼かれは何かなに大切たいせつな祕密ひみつな物ものを有もつてゐると云

ふやうな風ふうをしてゐる。枕まくらの下や、寐臺ねだいの何處どこかに、何かなにをそツ

と隠かくして置くお、其それは盜ぬすまれるとか、奪うばはれるとか、云いふ氣遣きづかひ

の爲ためめではなく人ひとに見みられるのが恥はづかしいのでさうして隠かくして置お

く物ものがある。時とき々／＼同室どうしつの者等ものらに脊せを向むけて、獨窓ひとまどの所ところに立た

つて、何かなにを胸むねに着つけて、頭かしらを屈かゞめて熟視みつてゐる様子やうす。誰たれか若も

し近着ちかづきでもすれば、極惡きまわるさうに急いそいで胸むねから何かなにを取とつて隠かくし

て了^{しま}ふ。然^{しか}し其^{その}祕密^{ひみつ}は直^{すぐ}に解^{わか}るのである。

『私^{わたくし}をお祝^{いは}ひなすつて下^{くだ}さい。』

と、彼^{かれ}は時^{とき}々^{／＼}、アイワン、デミトリチに云^いふことがある。

『私^{わたくし}は第二^{だいに}等のスタニスラウの勳^{くんしやう}章^{しょう}を貰^{もら}ひました。此^この第二^{だいに}

等の勳^{くんしやう}章^{しょう}は、全^{ぜん}體^{たい}なら外^{ぐわい}國^{こくじん}人^{にん}でなければ貰^{もら}へないので

すが、私^{わたくし}には其^その、特^{とく}別^{べつ}を以^{もつ}てね、例^{れい}外^{ぐわい}と見^みえます。』

と、彼^{かれ}は訝^{いぶ}かるやうに些^ちと眉^{まゆ}を寄^よせて微笑^{びせう}する。

『實^{じつ}を申^{まを}しますと、是^{これ}はちと意^い外^{ぐわい}でしたので。』

『私^{わたくし}は奈^な何^{なん}もさう云^いふもの^にに就^ついては、全^{まる}然^で解^{わか}らんです。』

と、イワン、デミトリチは愁^{うれ}はしさうに答^{こた}へる。

『然^{しか}し私^{わたくし}が早^{さう}晩^{ばん}手^てに入^いれやうと思^{おも}ひますのは、何^{なん}だか知^しつてお

るでになりますか。』

先もとの郵便局員いうびんきよくゐんは、さも狡猾ずるさうに眼めを細ほそめて云いふ。

『私は屹度わたくしきつとこんど此度は瑞典スウェーデンの北極星ほくきよくせいの勳章くんしやうを貰もらはうと思おもつて居をるです、其勳章そのくんしやうこそは骨ほねを折をる甲斐かひのあるものです。

白しろい十字架じか架かに、黒リボンくろの附ついた、其それは立派りつぱです。』

此この六號室程がうしつほど單調たんてうな生活せいくわつは、何處どこを尋ねても無ないであ

らう。朝あさには患者等くわんじやらは、中風患者ちゆうぶくわんじやと、油切あぶらぎつた農夫のうふとの

外ほかは皆みんな玄關げんくわんに行いつて、一つ大盥おほだらひで顔かほを洗あらひ、病院服びやうあんふく

の裾すそで拭ふき、ニキタが本院ほんゐんから運はこんで來くる、一杯ぱいに定めさだられた

る茶ちやを錫すずの器うつはで啜するのである。正午ひるには酢すく漬つけた玉菜たまなの牛肉汁にくじる

と、飯めしとで食しょくじ事じをする。晚ばんには晝食ひるめしの餘あまりの飯めしを食たべるので。

其そのあひだ間よこは横になるとも、睡ねむるとも、空そらを眺ながめるとも、室へやの隅すみか

ら隅すみへ歩あるくとも、恚かうして毎まい日にちを送おくつてゐる。

新しい人ひとの顔かほは六號室がうしつでは絶たえて見みぬ。院いん長ちやうアンドレイ、

エヒミチは新あらたな瘋癲ふうてん患者くわんじやはもう疾とくより入にふ院いんせしめぬから。

又誰またれとて這こんな麼瘋癲ふうてん者しやの室へやに參さん觀くわんに來くる者ものも無ないから。唯たゞ二

ヶ月げつに一度ど丈だけ、理髮師とこやのセミヨン、ラザリチ計ばかり此こへ來くる、其そ

男のをとこは毎いっも醉よつてニコ／＼しながら遣やつて來きて、ニキタに手傳てつだ

はせて髪かみを刈かる、彼かれが見みえると患者くわんじや等は囂がや々と云いつて騒さわぎ出だ

す。

恚かく患者くわんじや等は理髮師とこやの外ほかには、唯たゞニキタ一人ひとり、其それより外ほかに

は誰たれに遇あふことも、誰たれを見みることも叶かなはぬ運命うんめいに定めさだられてゐ

た。

しかるに近頃ちかごろに至いたつて不思議ふしぎな評判ひやうばんが院内あんないに傳つたはつた。
院長あんちやうが六號室がうしつに足繁あしづげく訪問ほうもんし出したとの風評ひやうばん。

(五)

不思議ふしぎな風評ひやうばんである。

ドクトル、アンドレイ、エヒミチ、ラアギンは風變ふうがりな人にんげ
間で、青年せいねんの頃ころには甚敬はなはだ虔度けんで、身みを宗教しゆうけう上じやうに立たてや
うと、千八百六十三年ねんに中學ちゆうがくを卒業そつげふすると直すぐ、神學しんがく
大學がくに入いらうと決けつした。然しかるに醫學博士いがくはかせにして、外科専門げくわせんもん家

なる彼が父は、斷乎として彼が志望を拒み、若し彼にして司祭となつた曉は、我が子とは認めぬと迄云張つた。が、アンドレイ、エヒミチは父の言ではあるが、自分は是迄醫學に對して、又一般の専門學科に對して、使命を感じたことは無かつたと自白してゐる。

左に右、彼は醫科大學を卒業して司祭の職には就かなかつた。而して醫者として身を立つる初めに於ても、猶今日の如くべつだんしゆうけうかところすく。彼の容貌はぎすくし別段宗教家らしい所は少なかつた。彼の容貌はぎすくして、何處か百姓染みて、※鬚から、ベツそりした髪、ぎごちない不態な恰好は、宛然大食の、呑※の、頑固な街道端の料理屋なんどの主人のやうで、素氣無い顔には青筋が顯れ、

眼はめちひ小さく、鼻ははな赤く、肩幅かたはびろ廣く、脊高せいたかく、手足てあしが圖づぬ※けて大おほ
 きい、其手そのてで捉つかまへられやうものなら呼吸こきふも止まりさうな。其れそ
 でゐて足音あしおとは極ごくく靜しづかで、歩あるく様子は注意ちゆうい深い忍しのび足あしのやう
 である。狭い廊下せま らうかで人に出遇であふと、先づ道みちを除よけて立留たちどまり、『失
 敬』と、さも太い聲ふとこゑで云いひさうだが、細いテノルで然さう挨あい拶さつ
 する。彼の頸かれくびには小ちひさい腫物はれものが出来できてゐるので、常つねに糊付のりつけシ
 ヤツは着きないで、柔やはらかな麻布あさか、更紗さらさのシャツを着きてゐるので。
 而さうして其服装そのふくさうは少すこしも醫者いしやらしい所ところは無なく、一つフロツクコー
 トを十年ねんも着續きつづけてゐる。稀まれに猶太人ジウの店みせで新あたらしい服ふくを買かつて來き
 ても、彼かれが着きると猶且やはり皺しわだらけな古着ふるぎのやうに見みえるので。一つ
 フロツクコートで患くわんじや者うも受うけ、食事しょくじもし、客きやくにも行ゆく。然しか

し其^それは彼^{かれ}が吝^{りん}嗇^{しよく}なるのではなく、扮^{なり}装^{まつた}などには全^むく無^{とん}頓^ち着^{やく}なのによ^よるのである。

アンドレイ、エヒミチが新^{あらた}に院^{いん}長^{ちやう}として此^{この}町^{まち}に來^きた時^{とき}は、此^この病^{びやう}院^{いん}の亂^{らん}脈^{みやく}は名^{めい}状^{じやう}すべからざるもので。室^{しつ}内^{ない}と云^いはず、廊^{らう}下^かと云^いはず、庭^{には}と云^いはず、何^{なん}とも云^いはれぬ臭^{しう}氣^きが鼻^{はな}を衝^ついて、呼^い吸^きをするさへ苦^{くる}しい程^{ほど}。病^{びやう}院^{いん}の小^こ使^{つかひ}、看^{かん}護^ご婦^ふ、其^その子^こ供^{ども}等^らは皆^{みな}患^{わん}者^{じや}の病^{びやう}室^{しつ}に一^{しよ}所^{きぐわ}に起^{おこ}臥^ふして、外^げ科^{くわし}室^{しつ}には丹^{たん}毒^{どく}が絶^たえたこと^なは無^ない。患^{くわん}者^{じや}等^らは油^{あぶら}蟲^{むし}、南^{なん}京^{きん}蟲^{むし}、鼠^{ねず}の族^{みよ}に責^せめ立^たてられて、住^すんであることも出^で來^きぬと苦^く情^{じやう}を云^いふ。器^き械^{がい}や、道^{だう}具^ぐなどは何^{なに}もなく外^げ科^{くわ}用^{よう}の刃^は物^{もの}が二^はつある丈^{だけ}で體^{たい}温^{いん}器^きすら無^ないのである。浴^{よく}盤^{ばん}には馬^{じや}鈴^が薯^{たら}が投^な

込げこんであるやうな始末しまつ、代診だいしん、會計くわいけい、洗濯女せんたくをんなは、患くわん
 者じゃを掠かすめて何なんとも思おもはぬ。話はなしには前さきの院ゐん長ちやうは往々まゝ病院びやうゐん
 のアルコールを密賣みつばいし、看護婦かんごふ、婦人患者ふじんくわんじやを手當次第てあたりしだい妾かけ
 としてゐたと云いふ。で、町まちでは病院びやうゐんの這麼有様こんなありさまを知らぬの
 では無なく、一層棒大そうぼうだいにして亂次だらしの無ないことを評判ひやうばんしてゐた
 が、是これに對たいしては人々ひと／＼は至いたつて冷淡れいたんなもので、寧ろ病むし
 院びやうゐんの辯護べんごをしてゐた位くらゐ。病院びやうゐんなどに入るものは、皆病人みんなやうにん
 や百姓ひやくしやう共どもだから、其位そのくらゐな不自由ふじいうは何なんでも無ないことで
 ある、自家じかにゐたならば、猶更なほさら不自由ふじいうを爲せねばなるまいとか、
 地方自治體ちほうじちたいの補助ほじよもなくて、町獨立まちどくりつで立派りつぱな病院びやうゐんの維持みぢさ
 れやうは無ないとか、左ひだりに右惡みぎわるいながらも病院びやうゐんの有あるのは無ない

よりも増ましであるとかと。

アンドレイ、エヒミチは院いんちやう長ちやうとして其その職しよくに就ついた後の恁あゝる亂脈らんみやくに對たいして、果はたして是これを如何いか様やうに所置しよちしたらう、敏捷てきぱきと院内いんないの秩序ちつじよを改かい革かくしたらうか。彼かれは此この不順ふじゆん序じよに對たいしては、さのみ氣きを留とめた様子やうすはなく、唯看護婦たゞかんごふなどの病室びやうしつに寐ねることを禁きんじ、機械きかいを入いれる戸棚とだなを二個ふたつ備そな付へつけた計ばかりで、代だ診いしんも、會計くわいけいも、洗濯婦せんたくをんなも、元もとの儘ままに爲して置おいた。

アンドレイ、エヒミチは知識ちしきと廉直れんちよくとを頗すこぶる好このみ且かつ愛あいしてゐたのであるが、偕さて彼かれは自分じぶんの周圍まはりには然さう云いふ生せい活くわつを設まうける事ことは到底たうてい出來できぬのであつた。其それは氣力きりよくと、權けん力りよくに於おける自信じしんとが足たりぬので。命令めいれい、主張しゆちやう、禁止きんし、恁かうい云ことふ事ことは

すべて彼には出来ぬ。丁度聲を高めて命令などは決して致さぬ
 と、誰にか誓でも立てたかのやうに、呉れとか、持つて來いとか
 とは奈何しても言へぬ。で、物が食べたくなつた時には、何時も
 躊躇しながら咳拂して、而して下女に、茶でも呑みたいも
 のだとか、飯にしたいものだとか云ふのが常である、其故に會
 計係に向つても、盗むではならぬなどとは到底云はれぬ。
 無論放逐することなどは爲し得ぬので。人が彼を欺いたり、或
 は諂つたり、或は不正の勘定書に署名をする事を願ひでも
 されると、彼は蝦のやうに眞赤になつて只管に自分の悪いこと
 を感じはする。が、猶且勘定書には署名をして遣ると云ふ
 やうな質。

はじめ

初にアンドレイ、エヒミチは熱心に其職を勵み、毎日

朝から晩まで、診察をしたり、手術をしたり、時には産婆

をも爲たのである、婦人等は皆彼を非常に褒めて名醫である、

殊に小兒科、婦人科に妙を得てゐると言囃してゐた。が、

彼は年月の経つと共に、此事業の單調なものと、明瞭に益の

無いのを認めるに従つて、段々と厭きて來た。彼は思ふたの

である。今日は三十人の患者を受ければ、明日は三十五人來

る、明後日は四十人に成つて行く、慙く毎日、毎月同事

を繰返し、打續けては行くものゝ、市中の死亡者の數は決

して減じぬ。又患者の足も依然として門には絶えぬ。朝から

午まで來る四十人の患者に、奈何して確實な扶助を與へる

ことが出來やう、故意ならずとも虚偽を爲しつゝあるのだ。一統
 計年度に於て、一萬二千人の患者を受けたとすれば、即ち
 一萬二千人は欺かれたのである。重い患者を病院に入
 院させて、其れを學問の規則に従つて治療する事は出來ぬ。
 如何なれば規則はあつても、茲に學問は無いのである。哲學
 を捨て了つて、他の醫師等のやうに規則に従つて遣らうとするの
 には、第一に清潔法と、空氣の流通法とが缺くべからざる物
 である。然るに這麼不潔な有様では駄目だ。又滋養物が肝
 心である。然るに這麼臭い玉菜の牛肉汁などでは駄目だ、又
 善い補助者が必要である、然るに這麼盗人計りでは駄目だ。
 而して死が各人の正當な終であるとするなれば、何の爲に

ひと／＼の死しの邪魔じやまをするのか。假かりにある商しやうにん人とか、ある官吏わんりとか、五年十年餘計ねん ねんよけいに生延いきのびたとして見た所み ところで、其それが何なんになるか。若もしまたい又醫學がくの目的もくてきが藥を以て、苦痛くつうを薄うすらげるものと爲なすなれば、自然しぜん茲こゝに一つの疑問ぎもんが生しやうじて來る。苦痛くつうを薄うすらげるのは何なんの爲ためか？ 苦痛くつうは人ひとを完くわん全ぜんに向むかはしむるものと云いふは無いなか、又人またじん類るゐが果はたして丸ぐわん藥やくや、水すゐ藥やくで、其苦痛そのくつうが薄うすらぐものなら、宗しゆう教けうや、哲學てつがくは必要ひつえうが無なくなつたと棄すつるに至いたらう。プシキンすうねんかんちゆうぶは死しに先さきだて非ひ常じやうに苦痛くつうを感じかん、不幸ふかうなるハイネすうねんかんちゆうぶは數年間ちゆうぶ中風かゝに罹ふつて臥ふしてゐた。して見みれば原げん始ちゆう蟲ごの如ごとき我々われに、切せめて苦難くなんてふものが無なかつたならば、全まつたく含がん蓄ちくの無ない生せい活くわつとなつて了しまふ。からして我々われは病氣びやうき

するのは寧ろ當然では無いか。

忤る議論に全然心を壓しられたアンドレイ、エヒミチは遂に匙を投げて、病院にも毎日は通はなくなるに至つた。

(六)

彼の生活は此の如くにして過ぎ行いた。朝は八時に起き、服を着換へて茶を呑み、其れから書齋に入るか、或は病院に行くかである。病院では外來患者がもう診察を待構へて、狭い廊下に多人數詰掛けてゐる。其側を小使や、看護婦が靴で煉瓦の床を音高く踏鳴して往來し、病院

服んふくを着きてゐる瘡やせた患者くわんじやら等とほが通とほつたり、死人しにんも昇かつぎ出だす、不
 潔けつ物ぶつを入いれた器うつはをも持もつて通とほる。子供こどもは泣なき叫さけぶ、通とほり風かぜは
 する。アンドレイ、エヒミチは恁かうい云ふ病びやう院あんの有あり様さまでは、熱ね
 病び患い者や、肺はい病びやう患くわんじや者やには最も可よくないと、始し終ゆ思おもひ/
 \するのであるが、其それを又また奈どう何ことする事ことも出で来きぬので有あつた。
 代だい診しんのセルゲイ、セルゲヰチは、毎いも控ひかへ所じよに院あん長ちやうの
 出でて来くるのを待まつてゐる。此この代だい診しんは脊せの小ちひさい、丸まるく肥ふつた
 男をとこ、頬ほ髯ひげを綺きれ麗いに剃そつて、丸まるい顔かほは毎いも好いく洗あらはれてゐて、其そ
 の氣き取どつた様やう子すで、新あらたしいゆつとりした衣服いふくを着つけ、白しろの襟えり襟かざ
 飾りをした所ところは、全まる然だで代だい診しんのやうではななく、元げん老らう議ぎ員ゐんとで
 も言いひたいやうである。彼かれは町まちに澤たく山さんの病びやう家かの顧とく主いを持もつて

る。で、彼は自分かれ じぶんを心こころ窃ひそかに院あんちやう長はるかより遙じつさいに實際おに於おいて、
 經驗けいけんに積つんであるものと認みとめてゐた。何なんとなれば院あんちやう長はるかには
 町まちに顧とくい主びやうかの病家すこなどは少しも無ないのであるから。控ひかへじよ所はは、
 壁かべに大おほきい額縁がくぶちに填はまつた聖像せいざうが懸かつてゐて、重おもい燈とう明みやうが
 下さげてある。傍そばには白しろい布きを被きせた讀經臺どきやうだいが置おかれ、一いっ方ぱうには
 大主教だいしゆけうの額がくが懸かけてある、又またスウヤトコルスキイ修道院しうだうあんの額がく
 と、枯かれた花環はなわとが懸かけてある。此この聖像せいざうは代だい診しん自みづから買かつて
 此所こゝに懸かけたもので、毎まい日にち曜日えうび、彼かれの命めい令れいで、誰だれか患くわんじや者者
 の一人ひとりが、立たつて、聲こゑを上げあげて、祈きたう禱ぶん文よを讀よむ、其それから彼かれは
 自身じしんで、各かく病室びやうしつを、香爐かうろを提さげて振ふりながら廻まはる。
 患くわんじや者者は多おほいのに時間じかんは少すくない、で、毎いっも極ごくく簡かん單たんな質しつも

問と、塗藥ぬりぐすりか、※麻子油位ひましあぶらぐらゐの藥を渡して遣るのに留とどま
 つてゐる。院長めんちやうは片手かたてで頰杖ほゝづゑを突きながら考かんがへ込んで、
 唯機械的たゞきかいてきに質問しつもんを掛けるのみである。代診だいしんのセルゲイ、セ
 ルゲヰチが時々とき／＼手を擦りく口くちを入れる。『此の世には皆人みぢんと
 が病氣びやうきになります、入用いりようなものがありません、何となれば、
 是皆親切こゝろなしんせつな神様かみさまに不熱心ふねつしんでありますから。』診察しんさつの時に
 院長めんちやうはもう疾とうより手術しゆじゆつを爲る事は止めてゐた。彼は血ち
 を見るさへ不愉快ふゆくわいに感じてゐたからで。又子供またこどもの咽喉のどを見るの
 で口くちを開あかせたりする時に、子供こどもが泣叫なきさけび、小さい手てを突張つツぱつ
 たりすると、彼は其聲かれそのこゑで耳みみがガンとして了しまつて、眼めが廻まはつて涙なみだ
 が滴こぼれる。で、急いそいで藥くすりの處方しよほうを云いつて、子供こどもを早はやく連つれて行い

つて呉れと手を振る。

診察の時、患者の臆病、譯の解らぬこと、代診の傍にゐること、壁に懸つてゐる畫像、二十年以上も相變らずに掛けてゐる質問、是等は院長をして少からず退屈せしめて、彼は五六人の患者を診察し終ると、ふいと診察所から出て行つて了ふ。で、後の患者は代診が彼に代つて診察するのであつた。

院長アンドレイ、エヒミチは疾から町の病家を有たぬのを、却つて可い幸に、誰も自分の邪魔をするものは無いと云ふ考で、家に歸ると直ぐ書齋に入り、讀む書物の澤山あるので、此の上なき満足をもつて書見に耽るのである、彼は月給を受

取^けると直^すぐ半^{はん}分^{ぶん}は書^{しよ}物^{もつ}を^か買^かふの^に費^{つひ}や^す、其^その六^ま間^か借^かりて^る
 る室^{へや}の三^{さん}つには、書^{しよ}物^{もつ}と古^{ふる}雜^{ざつ}誌^しと^とで殆^{ほとん}ど埋^{づま}つて^る。彼^{かれ}が最^もつと
 このところ好^{この}む所^{ところ}の書^{しよ}物^{もつ}は、歴^{れき}史^し、哲^{てつ}學^{がく}で、醫^い學^{がく}上^{じやう}の書^{しよ}物^{もつ}は、唯^{たゞ}
 『醫^ヱ者^{ラーチ}』と云^いふ一^い雜^{ざつ}誌^しを取^とつて^るの^に過^すぎぬ。讀^{どく}書^{しよ}爲^し初^{はじ}める
 と毎^いつも數^{すう}時^じ間^{かん}は續^{つづ}け^さまに讀^よむのであるが、少^{すこ}しも其^それで疲^{つか}勞^れ
 ぬ。彼^{かれ}の書^{しよ}見^{けん}は、イワ^ん、デミトリチのやうに神^{しん}經^{けい}的^{てき}に、迅^{じん}
 速^{そく}に讀^よむのではな^く、徐^{しづ}に眼^めを通^{とほ}して、氣^きに入^いつた所^{ところ}、了^{れう}解^{かい}
 し得^えぬ所^{ところ}は、留^{とど}まり^くしな^がら讀^よんで行^ゆく。書^{しよ}物^{もつ}の側^{そば}には毎^いつも
 ウオツカ^の壇^{びん}を置^おいて、鹽^{しほ}漬^{づけ}の胡^{きう}瓜^りや、林^{りん}檣^ごが、デス^クの羅^ら紗^{しや}
 の布^{きれ}の^{うへ}に置^おいてある。半^{はん}時^じ間^{かん}毎^{ごと}に彼^{かれ}は書^{しよ}物^{もつ}から眼^めを離^{はな}さ
 ず、ウオツカを一杯^{ぱい}注^{いつ}いでは吞^の乾^みし、而^{さう}して矢^や張^{はり}見^みず^に胡^{きう}瓜^りを

てさぐり
手探で食ひ缺ぐ。

三時になると彼は徐に厨房の戸に近づいて咳拂ひをして云ふ。

『ダリユシカ、晝食でも遣り度いものだな。』

不味さうに取揃へられた晝食を爲し終へると、彼は兩手

を胸に組んで考へながら室内を歩き初める。其中に四時が鳴

る。五時が鳴る、猶彼は考へながら歩いてゐる。すると、時

々、厨房の戸が開いて、ダリユシカの赤い寐惚顔が顯はれる。

『旦那様、もうビールを召上ります時分では御座りませんか』

と、彼女は氣を揉んで問ふ。

『いや未だ……もう少し待たう……もう少し……。』

と、彼は云ふ。

晩には毎も郵便局長のミハイル、アウエリヤ又牛チが遊

びに来る。アンドレイ、エヒミチに取つては此の人間計りが、町

中で一人氣の置けぬ親友なので。ミハイル、アウエリヤ又

牛チは元は富んでゐた大地主、騎兵隊に屬してゐた者、然る

に漸々身代を耗つて了つて、貧乏し、老年に成つてから、

遂に此の郵便局に入つたので。至つて元氣な、壯健な、立

派な白い頬鬚の、快活な大聲の、而も氣の善い、感

情の深い人間である。然し又極く腹立易い男で、誰か郵

便局に来た者で、反對でもするとか、同意でも爲ぬとか、

理屈でも並べやうものなら、眞赤になつて、全身を顫はして怒

立ち、雷のやうな聲で、黙れ！ と一喝する。其故に郵便
 局に行くのは怖いと云ふは一般の評判。が、彼は町の者を
 恠く部下のやうに遇ふにも拘らず、院長アンドレイ、エヒミ
 チ計りは、教育があり、且つ高尚な心を有つてゐると、敬
 ひ且つ愛してゐた。

『やあ、私です。』

と、ミハイル、アウエリヤヌキチは毎のやうに恠う云ひながら、
 アンドレイ、エヒミチの家に入つて來た。

二人は書齋の長椅子に腰を掛けて、暫時莨を吹かしてゐる。

『ダリユシカ、ビールでも欲しいな。』

と、アンドレイ、エヒミチは云ふ。

はじめの壇は二人共無言の行で吞乾して了ふ。院長は考

へ込んである、ミハイル、アウエリヤヌキは何か面白い話を

爲やうとして、愉快さうになつてゐる。

話は毎も院長から、初まるので。

『何と残念なことぢや無いですかなあ。』

と、アンドレイ、エヒミチは頭を振りながら、相手の眼を見ずに

徐々と話出す。彼は話をする時に人の眼を見ぬのが癖。

『我々の町に話の面白い、知識のある人間の皆無なのは、

實に遺憾なことぢや有りませんか。是は我々に取つて大なる不

幸です。上流社會でも卑劣なこと以上には其教育の程

度は上らんですから、全く下等社會と少しも異らんです

。』

『其れは眞實です。』と、郵便局長は云ふ。

『君も知つてゐられる通り。』

と、院長は静な聲で、又話續けるので有つた。

『此の世の中には人間の知識の高尚な現象の外には、ひと

して意味のある、興味のあるものは無いのです。人智なるものが、

動物と、人間との間に、大なる限界をなして居つて、人間

の靈性を示し、或る程度まで、實際に無い所の不死の換りを

爲してゐるのです。是に由つて人智は、人間の唯一の快

樂の泉となつてゐる。然るに我々は自分の周圍に、些も知識

を見ず、聞かずで、我々は全然快樂を奪はれてゐるやうな

ものです。勿論我々には書物が有る。然し是は活きた話と

か、交際とかと云ふものとは又別で、餘り適切な例では有り

ませんが、例へば書物はノタで、談話は唱歌でせう。』

『其れは眞實です。』と、郵便局長は云ふ。

ふたりは黙る。厨房からダリユシカが鈍い浮かぬ顔で出て来て、

片手で頬杖を爲て、話を聞かうと戸口に立留つてゐる。

『あゝ君は今の人間から知識をお望みになるのですか？』

と、ミハイル、アウエリヤ又牛チは嘆息して云ふた。而して彼

は昔の生活が健全で、愉快で、興味の有つたこと、其

頃の上流社會には知識が有つたとか、又其社會では

廉直、友誼を非常に重んじてゐたとか、證文なしで錢

を貸したとか、貧窮な友人に扶助を與へぬのを恥としてゐ
 たとか、愉快な行軍や、戦争などの有つたこと、面白い
 人間、面白い婦人の有つたこと、又高加索と云ふ所は實に好
 い土地で、或る騎兵大隊長の夫人に變者があつて、毎で
 も身に士官の服を着けて、夜になると一人で、カフカズの山
 中を案内者もなく騎馬で行く。話に聞くと、何でも韃靼人
 の村に、其夫人と、土地の某公爵との間に小説があつた
 との事だ、とかと。

『へゝえ。』

と、ダリユシカは感心して聞いてゐる。

『而して可く呑み、可く食つたものだ。又非常な自由主義の人

間んげんなど有あつたツけ。』

アンドレイ、エヒミチは聞きいてはゐたが、耳みみにも留とまらぬ風ふうで、何なにかを考かんがへながら、ビールをチビリくくと呑のんでゐる。

『私わたしは奈何どうかすると知識ちしきのある秀才しうさいと話はなしを爲してゐることを夢ゆめに見みることがあります。』

と、院ゐん長ちやうは突だ然しぬけにミハイル、アウエリヤ又ことばさへぎ中ちゅう子しの言ことを遮さへぎつて言いふた。

『私わたしの父ちちは私わたしに立り派つぱな教けう育いくを興あたへたです、然しかし六十年ねんだい代だいの思し想さうの影えい響きやうで、私わたしを醫い者しやとして了しまつたが、私わたしが若もし其その時ときに父ちちの言いふ通とほりにならなかつたなら、今いま頃ごろは現げん代だい思し潮しやうの中ちゅう心しんとなつてゐたであらうと思おもはれます。其その時ときには屹きつ度ど大だい學がくの分ぶん

科けんわの教授けうじゆにでもなつてゐたのでせう。無論知識むろんちしきなるものは、
 永久えいきうのものでは無く、變遷へんせんして行くものですが、然しかし生せい活くわくと云いふものは、忌々いまくしい輪索わなです。思想しさうの人間にんげんが成せい熟じゆく
 の期きに達たつして、其思想そのしさうが發展はつてんされる時ときになると、其人間そのにんげん
 は自然しぜん自分じぶんがもう已すでに此の輪索こわなに掛かつてゐる遁のがれる路みちの無なくなつ
 てゐるのを感じかんじます。實際じつさい人間にんげんは自分じぶんの意旨いしに反はんして、或あるは
 偶然ぐうぜんな事ことの爲ために、無むから生せい活くわつに喚出よびだされたものであるので
 す……。」』

『其それは眞實まったくです。』

と、ミハイル、アウエリヤヌ中ちゆうは云いふ。

アンドレイ、エヒミチは依然やはり相手あひての顔かほを見みずに、知識ちしきある者ものの

話はな計けいりを續つづける、ミハイル、アウエリヤ又牛うしは注ちゆう意いうして聽きいてゐながら『其それは眞ま實じつです。』と、其それ計けいりを繰くり返かへしてゐた。

『然しかし君きみは靈れい魂こんの不ふ死しを信しんじなさんのですか？』
と、俄にはかにミハイル、アウエリヤ又牛うしは問とふ。

『いや、ミハイル、アウエリヤ又牛うし、信しんじません、信しんじる理り由いうが無ないのです。』と、院ゐん長ちやうは云いふ。

『實じつを申まをすと私わたしも疑うたがつてゐるのです。然しかもつとわたくしあるとき
なん者もののやうな感かんもするですがな。其それは時とき／＼時とき憊かう思おもふ事ことが
あるです。

這麼こんな老らう朽きうな體からだは死しんでも可いい時じ分ぶんだ、とさう思おもふと、忽たちち又また

何なんやら心こころの底そこで聲こゑがする、氣遣きづかふな、死ぬし事は無ないと云いつて居ゐるやうな。』

九時じすこ少し過すぎ、ミハイル、アウエリヤヌチは歸かへらんとて立たちあ上がり、玄關げんくわんで毛皮けがはの外ぐわいたう套ひつかを引掛ひつかけながら溜息ためいきして云いふた。

『然しかし我われ々くは随分ずるぶん酷ひどい田舎ゐなかに引込ひっこんだものさ、殘念ざんねんなのは、
 這麼處こんなところで往生わうじやうをするのかと思おもふと、あゝ……。』

(七)

親友しんいうを送出おくりだして、アンドレイ、エヒミチは又また讀書どくしよを初めはじ

るのであつた。夜は靜で何の音も爲ぬ。時は留つて院長と共に書物の上に途絶えて了つたかのやう。此の書物と、青い傘を掛けたランプとの外には、世に又何物も有らぬかと思はるる靜けさ。院長の可畏き、無人相の顔は、人智の開發に感ずるに従つて、段々と和ぎ、微笑をさへ浮べて來た。

『あゝ、奈何して、人は不死の者では無いか。』
と、彼は考へてゐる。『腦髓や、視官、言語、自覺、天才

などは、終には皆土中に入つて了つて、旋て地殻と共に冷却し、何百萬年と云ふ長い間、地球と一所に意味もなく、目的も無く廻り行くやうになるとなれば、何の爲に這麼物が有るのか……。』
『冷却して後、飛散するとすれば、高尚

なる殆ど神の如き智力を備へたる人間を、虚無より造出する
 の必要はない。而して恰も嘲るが如くに、又人を粘土に化する
 必要は無い。あゝ物質の新陳代謝よ。然ながら不死の代
 替を以て、自分を慰むると云ふ事は臆病ではなからうか。
 自然に於て起る所の無意識なる作用は、人間の無智にも劣つて
 る。何となれば、無智には幾分か、意識と意旨とがある。が、
 作用には何もない。死に對して恐怖を抱く臆病者は、左の
 事を以て自分を慰める事が出来る。即ち彼の體を將來、草、
 石、墓の中に入つて、生活すると云ふ事を以て慰むることが
 出来る。

『其れとも物質の變換……物質の變換を認めて、直

に人間の不死と爲すと云ふのは、恰も高價なヴァイオリンが破れた後で、其明箱が換つて立派な物となると同じやうに、誠に譯の解らぬ事である。』

時計が鳴る。アンドレイ、エヒミチは椅子の倚掛に身を投
げて、眼を閉ぢて考へる。而して今讀んだ書物の中の面白い
影響で、自分の過去と、現在とに思を及すのであつた。
『過去は思出すのも不好だ、と云つて、現在も亦過去と同
様ではないか。』

と、彼は其れから患者等のこと、不潔な病室の中に苦しんでゐること、杯を思ひ起す。『未だ眠らないで南京蟲と戦つてゐる者も有らう、或は強く繃帯を締められて惱んで呻つてゐるものもあるひつよはうたいなやうな』

ものもある、又或る患者等は看護婦を相手に骨牌遊を爲てゐる者も有らう、或はヴオツ力を呑んでゐる者も有らう、病院の事業は總て二十年前と少しも變らぬ。窃盜、姦淫、詐欺の上^{うへ}に立てられてゐるのだ。であるから、病院は依然として、町の住民の健康には有害で、且つ不徳義なものである。』

と、彼は思ひ來り、更に又彼の六號室の鐵格子の中で、ニキタが患者等を打毆つてゐる事、モイセイ力が町に行つては、施を請ふてゐる姿などを思ひ出す。

其れより又彼は醫學の此の近き二十五年間に於て、如何に長足^{やうそく}の進歩を爲したかと云ふ事を考へ初める。

『自分が大學にゐた時分は、醫學も猶且、鍊金術や、形

而^{、やうがく}上^く學^{がく}などと同じ運^{おな}命^{うんめい}に至^{いた}るものと思^{おも}ふてゐ^{じつ}たが、實^{おどろ}に驚^{おどろ}
 く可^べき進^{しん}歩^ぽである。大^だ革^{かく}命^{めい}とも名^なけら^なれる位^{くらゐ}だ、防^{ぼう}腐^ふ法^{はふ}の發^は
 明^{つめい}によつて、大^{たい}家^かのピロウゴフさへも、到^{たう}底^{てい}出^で來^き得^でべからざ
 る事^{こと}を認^みてゐ^みた手^{しゅ}術^{じゆつ}が、容^{たやす}易^{やす}く遣^やら^られるやうにはなつた。今^{いま}
 では腹^{ふく}部^ぶ截^{せつ}開^{かい}の百^{たひ}度^どの中^{うち}、死^しを^み見^みることは一^い度^ど位^{くらゐ}なものであ
 る。梅^{ばい}毒^{どく}も根^{こん}治^ちさ^ちれる、其^{その}他^た遺^ゐ傳^{でん}論^{ろん}、催^{さい}眠^{みん}術^{じゆつ}、パステル
 や、コツホなどの發^は見^{けん}、衛^{ゑい}生^{せい}學^{がく}、統^{とう}計^{けい}學^{がく}などは奈^{なん}何^{どう}であら
 う……。』

我^{われ}々^れロシヤの地^ち方^{はう}團^{だん}體^{たい}の醫^い術^{じゆつ}は如^{どう}何^{なん}であらうか、先^まづ精^{せい}
 神^{しん}病^{びやう}に就^ついて云^いふなら^らば、現^{げん}今^{こん}の病^{びやう}氣^きの類^{るゐ}別^{べつ}法^{はふ}、診^{しん}診^だ
 斷^{だん}、治^ち療^{れう}の方^{はう}法^{はふ}、共^{とも}に皆^{みな}是^{これ}を過^く去^{わこ}の精^{せい}神^{しん}病^{びやう}學^{がく}と比^ひ較^{かく}す

るならば、其の差はエリボルスの山の如き高大なるものである。
 現今では精神病者の治療に冷水を注がぬ、蒸暑きシャ
 ツを被せぬ、而して人間的に彼等を取扱ふ、即ち新聞に
 記載する通り、彼等の爲に、演劇、舞蹈を催す。

彼は又慙く思考へた。

現時の見解及び趣味を見るに、六號室の如きは、誠に見る
 に忍びざる、厭惡に堪へざるものである。慙る病室は、鐵
 道を去ること、二百露里の此の小都會に於てのみ見るの
 である。即ち此所の市長並に町會議員は皆生物知りの町
 人である、であるから醫師を見ることは神官の如く、其
 の言ふ所を批評せずして信じてゐる。例へば、溶解せる鉛を

口くちに入るゝとも、少しも不思議ふしぎには思おもはぬであらう。が、若もし是これが他たの所ところに於おいては如何どうであらうか、公衆こうしゆうと、新聞紙しんぶんしとは必かならず此かくの如ごとき監獄バステリヤは、とうに寸斷すんだんにして了しまつたであらう。

『然しかし其それが奈何どうである。』

と、彼かれはパツと眼めを開ひらいて自みづから問とふた。

『防腐法ばうふほうだとか、コツホだとか、パステルだとか云いつたつて、實じ際つさいに於おいては世よの中なかは少すこしも是これまで迄かはと變かはらないでは無ないか、病びやう氣きの數すうも、死亡しぼうの數すうも、瘋癲ふうてん患者くわんじやの爲ためだと云いつて、舞踏會ぶたふくわやら、演藝會えんげいくわいやらが催もよほされるが、然しかし彼等かれらをして全まったく開放かいほうすることは出来できないでは無ないか。而して見みれば、何なんでも皆みな空むなしい事ことだ、ヴインナの完くわんぜん全ぜんな大學病院だいがくびやうあんでも、我々われ々の此この病び

やうめん 院と少しも差別は無いのだ。

然し俺は有害な事に務めてると云ふものだ、自分の欺いてゐる人間から給料を食つてゐる、不正直だ、然れども俺其

者は至つて微々たるもので、社會の必然の惡の一分子に過ぎぬ、總て町や、郡の官吏共でも皆詰り無用の長物だ。

唯だ給料を食つてゐるに過ぎん……而して見れば不正直の罪は、敢て自分計りぢや無い、時勢に有るのだ、もう二百年も晚

く自分が生れたなら、全然別の人間で有つたかも知れぬ。』

三時が鳴る、彼はランプを消して寢室に行つた。が、奈何しても睡眠に就くことは出来ぬのであつた。

(八)

二年^{ねん}此^{この}方^{かた}、地方自治體^{ちほうじちたい}はやうく饒^{ゆたか}になつたので、其^{その}管^{くわん}下^か
 に病^び院^{やうゐん}の設^{たて}立^{たて}られるまで、年^{ねん}々^く三百圓^{さんひゃくえん}づつを此^{この}の町^{ちやうりつび}立^た
 病^び院^{やうゐん}に補助金^{ほじよきん}として出^だす事^{こと}となり、病^び院^{やうゐん}では其^{その}れが爲^{ため}
 に醫^い員^{ゐん}を一人^{ひとり}増^ます事^{こと}と定め^{さだ}められた。で、アンドレイ、エヒミチの
 補助手^{ほじよしゅ}として、軍醫^{ぐんい}のエウゲニイ、フエオドロヰチ、ハヅトフ
 といふが、此^{この}の町^{まち}に聘^{へい}せられた。其^{その}人^{ひと}は未^まだ三十歳^{さんじさい}に足^たらぬ若^{わか}
 い男^{をとこ}で、頬^ほ骨^{ほね}の廣^{ひろ}い、眼^めの小^{ちひ}さい、ブルネト、其^{その}祖^そ先^{せん}は外^{ぐわい}
 國^{こくじん}人^{じん}で有^あつたかのやうにも見^みえる、彼^{かれ}が町^{まち}に來^きた時^{とき}は、錢^{ぜに}と
 云^いつたら一^{もん}文^{もん}もなく、小^{ちひ}さい靴^{かば}只^{ただ}一^{ひとつ}個^こと、下^げ女^{ぢよ}と徇^ふれてゐた醜^{みにく}

いをんなばか ともな
 女 計りを伴ふて來たので、而して此女には乳呑兒が有つた。彼は常に廂の附いた丸帽を被つて、深い長靴を穿き冬にけがはぐわいたう 外套を着て外を歩く。病院に來てより間もなく、代診のセルゲイ、セルゲヰチとも、會計とも、直ぐに親密になつたのである。下宿には書物は唯一冊『千八百八十年度ヴィンナ大學病院最近處方』と題するもので、彼は患者の所へ行く時には必ず其れを携へる。晩になると俱樂部に行つては玉突をして遊ぶ、骨牌は餘り好まぬ方、而して何時もお極りの文句を可く云ふ人間。
 病院には一週に二度づつ通つて、外來患者を診察したり、各病室を廻つたりしてゐたが、防腐法の此では全

おこな
 く行はれぬこと、呼吸器のことなどに就いて、彼は頗る異議を
 も
 有つてゐたが、其れと打付けて云ふのも、院長に恥を掻かせ
 るやうなものと、何とも云はずにはゐたが、同僚の院長ア
 ンドレイ、エヒミチを心秘に、老達の怠惰者として、奴
 かねばかためこ
 金計り溜込んでゐると羨んでゐた。而して其後任を自分で引
 きうたおも
 受け度く思ふてゐた。

(九)

ぐわつすゑかた
 三月の末つ方、消えがてなりし雪も、次第に跡なく融けた或夜、
 びやうめんには
 病院の庭には、椋鳥が切りに鳴いてた折しも、院長は親

友の郵便局長の立歸へるのを、門迄見送らんと室を出た。丁度其時、庭に入つて來たのは、今しも町を漁つて來た猶太人のモイセイカ、帽も被らず、跣足に淺い上靴を突掛けたまゝ、手には施の小さい袋を提げて。

『一錢おくんなさい!』

と、モイセイカは寒さに顫へながら、院長を見て微笑する。

辭することの出來ぬ院長は、隠から十錢を出して彼に遣る。

『これは可くない』と、院長はモイセイカの瘡せた赤い跣足の踝を見て思ふた。

『路は泥濘つてゐると云ふのに。』

院長は不覺に哀れにも、又不氣味にも感じて、猶太人の後

に尾おいて、其その禿頭げあたまだの、足あしの踝くるぶしなどを舐みしながら、別室べつしつまで行いつた。小使こつかひのニキタは相あひも變かはらず、雜具がらくたの塚つかの上うへに轉ころがつてゐたのであるが、院長ゐんちやうの入はつて來たのに吃驚びっくりして跳起はねおきた。

『ニキタ、今日こんにちは。』

と、院長ゐんちやうは柔やさしく彼かれに挨拶あいさつして。

『此この猶太人ジウに靴くつでも與あたへたら奈何どうだ、然さうでもせんと風邪かぜを引ひく。』

『はッ、拜承かしこまりました御坐ござります。直すぐに會計くわいけいに然さう申まをしまして。』

『然さうして下ください、お前まへは會計くわいけいに私わたしがさう云いつたと云いつて呉く

れ。』

玄關げんくわんから病室びやうしつへ通ふ戸かよとは開かれてゐた。イワン、デミ

トリチは寢臺ねだいの上に横うへよこになつて、肘ひぢを突ついて、さも心配しんぱいさうに、

ひとごゑ

人聲ひとごゑがするので此方こなたを見て

耳みみを欬そてゝゐる。と、急にきふ來た人の

と、急に來た人の

と、急に來た人の

ひと

ゐんちやう

院長わかだと解つたので、

彼は全身ぜんしんを怒いかりに顫ふるはして、寢床ねどこから

寢床ねどこから

とびあが

飛上りまつか、眞赤まっかになつて、

激怒げきどして、

病室びやうしつの

病室びやうしつの

眞中まんなかに走り出

で

て突立つたつた。

『やあ、院長ゐんちやうが來たぞ！』

イワン、デミトリチは高くたか※んで、笑わらひ出す。

『來た々々！ 諸君しよくんお目出たう、院長閣下ゐんちやうかくかが我々われくを訪はうも

問もんせられた！ 此こン畜生ちくしやうめ！』

と、彼は聲を甲走らして、地輔踏んで、同室の者等の未だ嘗つて見ぬ騷方。

『此ン畜生！ やい毆殺して了へ！ 殺しても足るものか、便所にでも敲込め！』

院長のアンドレイ、エヒミチは玄關の間から病室の内を覗込んで、物柔らかに問ふので有つた。

『何故ですね？』

『何故だと。』と、イワン、デミトリチは嚇すやうな氣味で、院長の方に近寄り、顫ふ手に病院服の前を合せながら。

『何故かも知れないものだ！ 此の盜人め！』

彼は惡々しきやうに唾でも吐つ掛けるやうな口付きをして。

『此の山師！ 人殺！』

『まあ、落着きなさい。』

と、アンドレイ、エヒミチは悪るかつたと云ふやうな顔付で云ふ。

『可くお聴きなさい、私は未だ何にも盗んだ事もなく、貴方に何も致したことは無いのです。貴方は何か間違つてお出なのでせう、ひどわたしおこ酷く私を怒つてゐなさるやうだが、まあ落着いて、靜かに、而して何を立腹してゐなさるのか、有仰つたら可いでせう。』

『だが何の爲に貴下は私を這麼ところに入れて置くのです？』

『其れは貴君が病人だからです。』

『はあ、病人、然し何百人と云ふ狂人が自由に其處邊

あるを歩いてゐるではないですか、其れは貴方々の無學なるに由つて、狂人と、健康なる者との區別が出来んのです。何の爲に私だの、そら此處にゐる此の不幸な人達計りが恰も獻祭のやぎのごとく、衆の爲に此に入れられてゐねばならんのか。貴方に居る奴等は、實に怪しからん、徳義上に於ては我々共より遙に劣等だ、何の爲に我々計りが此に入れられて居つて、貴方々は然うで無いのか、何處に那樣論理があります?』

『徳義上だとか、論理だとか、那樣事は何も有りません。唯場合です。即ち此處に入れられた者は入つてゐるのであるし、入れられん者は自由に歩いてゐる、其れ丈けの事です。私が醫者

で、あなた貴方せいしんびやうしやが精神病患者であるといふことに於て、徳義とくぎも無ければ、ろんり論理なも無いのです。詰りつま偶然ぐうぜんの場合のみです。』

『そんなへりくつわかん。』

と、イワン、デミトリチは小聲で云つて、自分の寢臺の上に坐り込む。

モイセイカは今日けふは院ゐん長ちやうのある爲ために、ニキタが遠慮ゑんりよして何なにも取返とりかへさぬので、貰もらつて來た雜物ざぶもつを、自分じぶんの寐臺ねだいの上うへに洗あらひ浚さひ廣ひろげて、一つく並ならべ初はじめる。パンの破片かけら、紙屑かみくづ、牛の骨うしほねなど、而さうして寒さむさに顫ふるへながら、猶太語エヴレイゴで、早言はやことに歌うたふやうに喋しゃべり出だす、大方おほかた開店かいてんでも爲した氣取きどりで何なにかを吹ふい聴ちやうしてゐるのあで有あらう。

『私を此處から出して下さい。』と、イワン、デミトリチは聲を顫はして云ふ。

『其れは出来ません。』

『如何云ふ譯で。其れを聞きませう。』

『其れは私の權内に無い事なのです。まあ、考へて御覽なさい、私が假に貴方を此から出たとして、甚麼利益が有りますか。先づ出て御覽なさい、町の者か、警察かが又貴方を捉へて連れて参りませう。』

『左様さく其れは然うだ。』と、イワン、デミトリチは額の汗を拭く、『其れは然うだ、然し私は如何したら可からう。』

アンドレイ、エヒミチはイワン、デミトリチの顔付、眼色抔

を酷く氣に入つて、如何かして此の若者を手懷けて、落着かせやうと思ふたので、其寐臺の上に腰を下し、些と考へて、偕言出す。

『貴方は如何したら可からうと有仰るが。貴方の位置を好くするのには、此から逃出す一方です。然し其れは残念ながら無益に歸するので、貴方は到底捉へられずには居らんです。社會が犯罪人や、精神病者や、總て自分等に都合の悪い人間に對して、自衛を爲すのには、如何したつて勝つ事は出来ません。で、貴方の爲すべき所は一つです。即ち此處に居る事が必要であると考え、安心をしてゐるのみです。』

『いや、誰にも此處は必要ぢや有りません。』

『然し已に監獄だとか、瘋癲病院だとかの存在する以上は、誰か其中に入つてゐねばなりません、貴方でなければ、私、でなければ、他の者が。まあお待ちなさい、左様今に遙か遠き未來に、監獄だの、瘋癲病院の全廢された曉には、即ち此の窓の鐵格子も、此の病院服も、全く無用になつて了ひませう、無論、然云ふ時は早晚來ませう。』

イワン、デミトリチはニヤリと冷笑つた。

『然でせう。』と、彼は眼を細めて云ふた。『貴方だの、貴方の補助者のニキタなどのやうな、然云ふ人間には、未來などは何の要も無い譯です。で、貴方は好い時代が來やうと濟してもゐられるでせうが、いや、私の言ふことは卑いかも知れませんが、笑

止しければお笑ひ下さい。然しです、新生活の曉は輝いて、正義が勝を制するやうになれば、我々の町でも大に祭をして喜び祝ひませう。が、私は其迄は待たれません、其時分にはもう死んで了ひます。誰かの子か孫かは、遂に其時代に遇ひませう。私は誠心を以て彼等を祝します、彼等の爲に喜びます！進め！我が同胞！神は君等に助を給はん！』と、イワン、デミトリチは眼を輝かして立上り、窓の方に手を伸して云ふた。『此の格子の中より君等を祝福せん、正義萬歳！正義萬歳！』

『何を那樣に喜ぶのか私には譯が分りません。』と、院長はイワン、デミトリチの様子が宛然芝居のやうだと思ひながら、又

其風そのふうが酷ひどく氣きに入いつて云いふた。

『成程なるほど、時ときが來くれば監獄かんごくや、瘋癲病院ふうてんびやうあんは廢はいされて、正義せいぎ

は貴方あなたの有仰おつしやる通とほり勝かちを占しめるでせう、然しかし生せい活くわつの實じつ際さい

が其それで變かはるものではありません。自然しぜんの法はふ則そくは依然いぜんとして元もと

の儘まです、人々ひと／＼は猶やはり且こん今日ごの如ごとく病やみ、老おい、死しするの

せう、甚麼立派どんなりつぱな生せい活くわつの曉あかつきが顯あらはれたとしても、畢つ竟まり人じん間げん

は棺くわん桶をけに打うち込こまれて、穴あなの中なかに投とうじられて了しまふのです。』

『では來世らいせいは。』

『何なに、來世らいせい。戯談じやうだんを云いつちや可いけません。』

『貴方あなたは信しんじなさらんと思みえるが私わたしは信しんじてます。ドストエフス

キイの中うちか、ウォルテルの中うちかに、小説中せうせつちゆうの人物じんぶつが云いつて

る事ことが有あります、若もし神かみが無なかつたとしたら、其時そのときは人ひとが神かみを考かんへ出ださう。で、私わたくしは堅かたく信しんじてゐます。若もし來らい世せいが無ないと爲したならば、其時そのときは大おほいなる人にんげん間の智ち慧ゑなるものが、早さう晩ばん是これを發はつ明めいしませう。』

『フ、ム、旨うまく言いつた。』

と、アンドレイ、エヒミチは最いと満まん足ぞく氣げに微び笑せうして。

『貴方あなたは然さう信しんじてゐなから結けつ構こうだ。然さう云いふ信しん仰かうが有ありさへすれば、假令たとひ壁かべの中なかに塗ぬり込こまれたつて、歌うたを歌うたひながら生せい活かつして行ゆかれます。貴方あなたは失しつ禮れいながら何處どこで教けう育いくをお受うけになつたか?』

『私わたくしは大だい學がくでゝす、然しかし卒そつ業げふせず終しまひました。』

『貴方は思想家で考かんが深い方かたです。貴方のやうな人は甚麼場所ひと どんなばしょにゐても、自身じしんに於おいて安心あんしんを求める事ことが出来できます。人生じんせいの解か悟いごに向むかつて居をる自由じいうなる深ふかき思想しきうと、此この世よの愚おろかなる騷さわぎに對たいする全ぜん然ぜんの輕蔑けいべつ、是これ即すなはち人にん間の之これ以上いじやうのものを未いまだ嘗かつて知しらぬ最大さいだい幸福かうふくです。而さうして貴方は縱令たとひ三重ちゆうの鐵格てつかく子の内うちに住すんでゐるやうが、此この幸福かうふくを有もつてゐるのでありますから。ヂオゲンを御覽ごらんなさい、彼かれは樽たるの中なかに住すんでゐました、然けれども地上ちじやうの諸王しよわうより幸福かうふくで有あつたのです。』

『貴方あなたの云いふヂオゲンは白癡はくちだ。』と、イワン、デミトリチは憂い悶もんして云いふた。『貴方あなたは何なんだつて私わたくしに解悟かいごだとか、何なんだとかと云いふのです。』と、俄にはかに怫然むきになつて立上たちあがつた。『私わたくしは人並ひとなみ

の生活せいくわつを好みこのます、實じつに、私は慙わたくしかうい云ふ窘きんちくきやう逐しつ狂かに雇かつてゐて、始終しじう苦くるしい恐怖おそれに襲おそはれてゐますが、或時あるときは生活せいくわつの渴か望つばうに心こころを燃もやされるです、非常ひじやうに人並ひとなみの生活せいくわつを望のぞみます、非常ひじやうに、其れは非常ひじやうに。』

かれは室内しつないを歩あるき初はじめたが、施やがて小聲こゑで又言また出ひだす。

『私は時折わたくしときをり種々いろくな事ことを妄想まうざうしますが、往々わうく幻想まぼろしを見るの
です、或人あるひとが來きたり、又人またひとの聲こゑを聞きいたり、音樂おんがくが聞きこえたり、
又林まはやしや、海岸かいがんを散步さんぽしてゐるやうに思おもはれる時ときも有あります。何ど
卒おそ私わたくしに世よの中なかの生活せいくわつを話はなして下ください、何かなに珍めづらしい事ことでも無な
いですか。』

『町の事まちことをですか、其れとも一般ぱんの事ことに就ついてゝすか？』

『先づ町の事からして伺ひませう。其れから一般のことを。』

『町では實にもう退屈です。誰を相手に話するものもなし。話

を聞く者もなし。新しい人間はなし。然し此頃ハバトフと云

ふ若い醫者が町には來たですが。』

『甚麼人間が。』

『いや、極く非文明的な、奈何云ふものか此の町に來る所の者

は、皆、見るのも胸の悪いやうな人間計り、不幸な町です。』

『左様さ、不幸な町です。』と、イワン、デミトリチは溜息し

て笑ふ。『然し一般には奈何です、新聞や、雑誌は奈何云ふ事

が書いてありますか？』

病室の中はもう暗くなつたので、院長は靜に立上る。

然して立ちながら、外國や、露西亞の新聞雜誌に書いてある珍らしい事、現今は恁云ふ思想の潮流が認められるとかとはなし、話を進めたが、イワン、デミトリチは頗る注意して聞いてゐた。が、忽ち、何か恐しい事でも急に思ひ出したかのやうに、彼は頭を抱へるなり、院長の方へくると背を向けて、寢臺の上に横になつた。

『奈何かしましたか?』と、院長は問ふ。

『もう貴方には一言だつて口は開きません。』

イワン、デミトリチは素氣なく云ふ。『私に管はんで下さい!』

『奈何したのです?』

『管はんで下さいと云つたら管はんで下さい、チヨツ、誰が那

様者ものと口くちを開きくものか。』

院長ゐんちやうは肩かたを縮ちぢめて溜息ためいきをしながら出でて行ゆく、而さうして玄げんく

關わんの間まを通とほりながら、ニキタに向むかつて云いふた。

『此處邊こゝらを少すこし掃除さうぢしたいものだな、ニキタ。酷ひどい臭におひだ。』

『拜承かしこまりました。』と、ニキタは答こたへる。

『何なんと面白おもしろい人間にんげんだらう。』と、院長ゐんちやうは自分じぶんの室へやの方ほうへ

歸かへりながら思おもふた。『此こゝへ來きてから何年なんねんぶり振ふりかで、恁かうい云ともふ共かたに語かた

られる人間にんげんに初はじめて出會でつくわした。議論ぎろんも遣やる、興味きようみを感かんずべき

事ことに、興味きようみを感かんじてゐる人間にんげんだ。』

彼かれは其後そのちどくしよ讀書なを爲うちす中うちにも、睡眠ねむりに就ついてからも、イワン、

デミトリチの事ことが頭あたまから去さらず、翌朝眼よくてうめを覺さましても、昨日きのふの智慧ちゑ

ある人間にんげんに遇あつたことを忘わすれる事ことが出来できなかつた、便宜べんぎも有あらばもう一度どかれ彼を是非ぜひ尋たづねやうと思おもふてゐた。

(十)

イワン、デミトリきチは昨日きのふと同じ位置おなゐちに、兩手りやうてで頭かしらを抱かへて、
兩足りやうあしを縮ちぢめた儘まま、横よこに爲なつてゐて、顔かほは見みえぬ。

『や、御機嫌ごきげんよう、今日こんにちは。』院長ゐんちやうは六號室がうしつへ入はいつて云いふた。『君きみは眠ねむつてゐるのですか？』

『いや私は貴方あなたの朋友ほういうぢや無いなです。』と、イワン、デミトリまチは枕まくらの中うちへ顔かほを愈い《いよく》埋うづめて云いふた。『又また甚麼どんなに貴あ

方なたは盡じんりよく力ちから仕しやうが駄目だめです、もう一言ごんだつて私わたくしに口くちを開ひらかせる事ことは出来できません。』

『變へんだ。』と、アンドレイ、エヒミチは氣きを揉もむ。『昨日きのふ我々われらは那麼あんなに話はなしたのですが、何なにを俄にはかに御立腹ごりつぷくで、絶交ぜつかうすると有おつしや仰おほるのです、何か其れとも氣きに障さはることも申しましたか、或あるひは貴方あなたの意見いけんと合あはん考かんがを云いひ出だしたので？』

『いや、那樣そんなら貴方あなたに云いひませう。』と、イワン、デミトリチは身みを起おこして、心しんぱい配はいさうに又また冷笑れいせう的に、ドクトルを見るみるので有あつた。『何も貴方あなたは探偵たんていしたり、質問しつもんをしたり、此こゝへ來きて爲するには當あたらんです。何處どこへでも他ほかへ行いつて爲した方が可よいです。私わたくしはもう昨日きのふ貴方あなたが何なんの爲ために來きたのか、解わかりましたぞ。』

『是は奇妙な妄想を爲たものだ。』と、院長は思はず微笑

する。『では貴方は私を探偵だと思像されたのですな。』

『左様。いや探偵にしろ、又私に窃に警察から廻はされた醫者にしろ、何方だつて同様です。』

『いや貴方は。困つたな、まあお聞きなさい。』と、院長は寢臺の傍の腰掛に掛けて責るがやうに首を振る。

『然し假りに貴方の云ふ所が眞實として、私が警察から廻され
た者で、何か貴方の言を抑へやうとしてゐるものと假定しませう。
で、貴方が其爲に拘引されて、裁判に渡され、監獄に入
れられ、或は懲役に爲れるとして見て、其れが奈何です、此
の六號室にゐるのよりも悪いでせうか。此に入れられてゐるよ

りも貴方あなたに取とつて奈何どうでせうか？ 私わたくしは此こより悪い所ところは無ないと思おも

ひます。若もし然さうならば何なにを貴方あなたは那樣そんなに恐おそれなさるのか？』

此このことばの言ことばにイワン、デミトリチは大おほいに感動かんどうされたと見みえて、彼かれ

は落おちつ着ちいて腰こしを掛かけた。

時ときは丁度ちやうど四時じ過ぎ。毎いっもなら院ゐん長ちやうは自分じぶんの室へやから室へやへと

歩あるいてゐると、ダリユシカが、麥酒ビールは旦那だんなさま如何いかですか、と問と

ふ刻限こくげん。戸外こぐわいは靜しづかに晴渡はれわたつた天氣てんきである。

『私は中食後散步ちやくしきごさんぽに出掛でかけましたので、些ちよつと立寄たちよりましたので

す。もう全然春まるではるです。』

『今いまは何なんぐわつ月ぐわつです、三月ぐわつでせうか？』

『左様さよう、三月ぐわつも末すゑです。』

『戸外は泥濘つて居りませう。』

『那樣でも有りません、庭にはもう小徑が出来てゐます。』

『今頃は馬車にでも乗つて、郊外へ行つたらさぞ好いでせう。』

『と、イワン、デミトリは赤い眼を擦りながら云ふ。』

して其れから家の暖い閑靜な書齋に歸つて……名醫に恃つて

頭痛の療治でも爲て貰つたら、久しい間私はもうこの人間ら

しい生活せいくわつを爲ないが、其にしても此處は實に不良な所だ。實

に堪へられん不良な所だ。』

昨日の興奮きふふんの爲にか、彼は疲れて脱然して、不良不良なが

ら言つてゐる。彼の指は顫へてゐる。其顔を見ても頭が酷く痛

んでゐると云ふのが解る。

『暖い閑靜な書齋と、此の病室との間に、何の差も無いのです。』と、アンドレイ、エヒミチは云ふた。『人間の安心と、満足とは身外に在るのではなく、自身の中に在るのです。』

『奈何云ふ譯で。』

『通常の人間は、可い事も、悪い事も皆身外から求めます。即ち馬車だとか、書齋だとかと、然し思想家は自身に求めめるのです。』

『貴方は那樣哲學は、暖な杏の花の香のする希臘に行つてお傳へなさい、此處では那樣哲學は氣候に合ひません。いやさうと、私は誰かとチオゲンの話を爲ましたつけ、貴方とでしたらう

か？』

『さやうきのわたくし
左様昨日私と。』

『チオゲンは勿論書齋だとか、暖い住居だとかには頓着

しませんでした。是は彼の地が暖いからです。樽の中に寐轉つ

て蜜柑や、橄欖を食べてゐれば其れで過ぎれる。然し彼をして

露西亞に住はしめたならば、彼必ず十二月所ではない、三月の陽

氣に成つても、室の内に籠つてゐたがるでせう。寒氣の爲に體も

何も屈曲つて了ふでせう。』

『いや寒氣だとか、疼痛だとかは感じない事が出来るです。マ

ルク、アウレリイが云つた事が有りませう。「疼痛とは疼痛

の活きた思想である、此の思想を變ぜしむるが爲には意旨の力を

奮^{ふる}ひ、而^{しか}して之^{これ}を棄^すて、以^{もつ}て、訴^{うつた}ふる事^{こと}を止^やめよ、然^{しか}らば疼^{とう}痛^{つう}
 は消^{せう}滅^{めつ}すべし。」と、是^{これ}は可^よく言^いつた語^{ことば}です、智^ち者^{しゃ}、哲^{てつ}人^{じん}、
 若^もしくは思^し想^{さう}家^かたるもの、他^た人^{にん}に異^{こと}なる所^{ところ}の點^{てん}は、即^{すなは}ち此^{こゝ}に在^ある
 のでせう、苦^く痛^{つう}を輕^{かろ}んずると云^いふ事^{こと}に。是^{こゝ}に於^{おい}てか彼^{かれ}等^らは常^{つね}に滿^ま
 足^{んで}く、何^{なに}事^{ごと}にも又^ま驚^{おどろ}かぬのです。』
 『では私^{わたくし}などは徒^{いたづら}に苦^{くる}み、不^ふ滿^{まん}を鳴^{なら}し、人^{にん}間^{げん}の卑^ひ劣^{れつ}に驚^{おどろ}いたり
 計^{ばか}りしてゐますから、白^{はく}癡^ちだと有^{おつ}仰^{しや}るのでせう。』
 『然^さうぢや無^ないです。貴^{あなた}方も愈^い。《いよく》深^{ふか}く考^{かん}慮^{がへ}るやう
 に成^なつたならば、我^{われ}々^くの心^{こゝろ}を動^{うご}す所^{ところ}の、總^{すべ}ての身^{しん}外^{ぐわい}の些^さ細^{さい}
 なる事^{こと}は苦^くにもならぬとお解^{わか}りになる時^{とき}が有^ありませう、人^{ひと}は解^{かい}悟^ご
 に向^{むか}はなければなりません。是^{これ}が眞^{しん}實^{じつ}の幸^{かう}福^{ふく}です。』

『解悟……』『イワン、デミトリチは顔を顰める。』『外部だとか、内部だとか……。いや私には然云ふ事は少しも解らんです。わたくし私の知つてゐる事は唯是丈です。』と、彼は立上り、怒つた目で院長を睨み付ける。『私の知つてゐるのは、神が人を熱血と、神経とより造つたと云ふ事丈です！ 又有機組織は、若し其れが生活力を有つてゐるとすれば、總ての刺戟に反應を起すべきものである。其れで私は反應してゐます。即疼痛に對しては、絶※と、涙とを以て答へ、虚偽に對しては憤懣を以て、陋劣に對しては厭惡の情を以て答へてゐるです。私の考では是が抑生活と名づくべきものだらうと。又有機體が下等に成れば成る丈け、より少く物を感じるので有ら

うと、其故それゆゑにより弱よわく刺戟しげきに答へるのである。で、高等かうとうに成な

れば随したがつてより強つよき勢せい力りよくを以もつて、實際じつさいに反應はんおうするのです。

あなたあなたは貴方いしやは醫者いしやでおゐでて、如何どうして那麼譯こんなわけがお解りわかにならんです。

くるしみくるしみかろ苦くるしみを輕かろんずるとか、何なんにでも満足まんぞくしてゐるとか、甚麼事どんなことにも

驚おどろかんと云いふやうになるのには、那あれです、那あゝい云いふ状態ざまになつて了しま

はんければ。』と、イワン、デミトリチは隣となりの油切あぶらぎつた彼の動かど

物うぶつを差さしてさう云いふた。『或あるひは又また苦痛くつうを以もつて自分じぶんを鍛練たんれんして、

其れに對たいしての感覺かんかくを恰まるで失しまつて了しまふ、言ことばを換かへて言いへば、生せ

活いくわつを止やめて了しまふやうなことに至いたらしめなければならぬのです。

わたくしわたくしむろんてつじん私わたしは無論もちろん哲人てつじんでも、哲學者てつがくしやでも無ないのですから。』と、更さらに

激げきして。『ですから、那麼事こんなことに就ついては何なにも解わからんです。

議論する力が無いのです。』

『如何してなく、貴方は立派に議論なさるです。』

『貴方が例證に引きなすつたストア派の哲學者等は立派な人達です。然しながら彼等の學説は已に二千年以前に廢れて了ひました、もう一步も進まんです、是から先、又進歩することは無い。如何となれば是は現實的でない、活動的で無いからで有る。恁云ふ學説は、唯種々の學説を集めて研究したり、比較したりして、之を自分の生涯の目的としてゐる、極めて少數の人計りに行はれて、他の多數の者は其れを了解しなかつたのです。苦痛を輕蔑すると云ふ事は、多數の人に取つたならば、即ち生活其物を輕蔑すると云ふ事にな

る。如何いかにとなれば、人間にんげん全體ぜんたいは、餓うゑだとか、寒さむだとか、凌はづ辱しめだとか、損そん失しつだとか、死しに對たいするハムレット的てきの恐怖おそれな
 どの感覺かんかくから成立なりたつてゐるのです。此この感覺かんかくの中うちに於おいて人じん
 生い全體ぜんたいが含ふくまつてゐるのです。之これを苦くにする事こと、惡にくむ事ことは出で
 來きます。が、之これを輕けい蔑べつする事ことは出で來きんです。有あるから、スト
 ア派はの哲てつ學がく者しやは未み來らいを有もつ事ことが出で來きんです。御ご覽らんなさい、世せ
 界かいの始はじめから、今こん日にちに至いたるまで、益えき 《ますく》進しん歩ぽして行ゆく
 ものは生せい存ぞん競きやう争さう、疼とう痛つうの感かん覺かく、刺し戟げきに對たいする反はん應おうの力ちから
 などでせう。』と、イワン、デミトリチは俄にはかに思想しきうの聯れん絡らくを失うしな
 つて、殘ざん念ねんさうに額ひたひを擦こすつた。
 『何なにか肝かん心じんなことを云いはうと思おもつて出でなくなつた。』

と、彼は續ける。『其れぢや 基^{ハリストス} 督^{トス}でも例^{れい}に引^ひきませう、基^{ハリス}督^{トス}は泣^ないたり、微笑^{びせう}したり、悲^{かな}んだり、怒^{おこ}つたり、憂^{うれ}ひしづ^{しづ}りして、現^{げん}實^{じつ}に對^{たい}して反^{はん}應^{おう}してゐたのです。彼^{かれ}は微笑^{びせう}を以^{もつ}てくるし、對^{たい}はなかつた、死^しを輕^{けい}蔑^{べつ}しませんでした、却^{かへ}つて「此^{この}の杯^きを我^{われ}より去^さらしめよ」と云^いふて、ゲフシマニヤの園^{その}で祈^{きたう}祷^{とう}しました。』

イワン、デミトリチは慙^かく云^いつて笑^{わら}ひだしながら坐^{すわ}る。『で假^かりに人^{にん}間^{げん}の満^{まん}足^{ぞく}と安^{あん}心^{しん}とが、其^{その}身^{しん}外^{ぐわい}に在^あるに非^あらずして、自^じ身^{しん}の内^{うち}に在^あるとして、又^{また}假^かりに苦^く痛^{つう}を輕^{けい}蔑^{べつ}して、何^{なに}事^{ごと}にも驚^{おどろ}かぬように爲^しなければならぬとして、見^みて、第^{だい}一^い貴^あ方^{なた}自身^{しん}は何^{なん}もとづ^{もとづ}に基^{こん}いて、這^{しん}麼^んこ^うを主^{しゅ}張^{ちやう}なさるのか、貴^あ方^{なた}は一

體哲人ですか、哲學者ですか？』

『いや私は哲學者でも何でも無い。が、之を主張するのは、

大に各人の義務だらうと思ふのです、是は道理の有る事で。』

『いや私の知らうと思ふのは、何の爲に貴方が解悟だの、苦痛だ

の、其れに對する輕蔑だの、其他の事に就いて自ら精通家と

認めてお出なのですか。貴方は何時にか苦んだ事でも有るのです

か、苦しみと云ふ事の理解を有つてお出でゝすか、或は失禮な

がら貴方はお幼少時分、打擲でもなされましたことがお有りな

のですか？』

『否、私の兩親は、身體上の處刑は非常に嫌つて居

たのです。』

わたくしち、私わたしは父ちちには酷ひどく仕置しおきをされました。私の父わたしちちは極ごくく苛酷かこくな官くわん員ゐんで有あつたのです。が、貴方あなたの事ことを申まをして見みませうかな。貴方あなたは一生しやうがいだれ涯か誰たれにも苛責かしやくされた事ことは無く、健康けんかうなること牛うしの如ごとく、嚴父げんぷの保護ほごの下もとに生せい長ちやうし、其それで學問がくもんさせられ、其それか
 らして割わりの好よい役やくに取付とりつき、二十年ねんいじやう以上あひだの間まも、暖爐だんろも焚たいて
 あり、燈あかりも明あかるき無料むれうの官宅くわんたくに、奴婢ぬひをさへ使つかつて住すんで、
 その上そのうへ、仕事しごとは自分じぶんの思おもふ儘まま、仕しても仕しないでも濟すんでゐると云い
 ふ位置あちで、生來せいらい貴方あなたは怠惰なまけもの者もので、嚴格げんかくで無ない人間にんげん、其そ
 れゆゑあなた故貴方なは何なんんでも自分じぶんに面倒めんどうでないやう、働はたらかなくとも濟すむ
 やうと計ばかり心掛こころがけてゐる、事業じげふは代診だいしんや、其他そのたのやくざもの
 に任せ切まかり、而さうして自分じぶんは暖い靜あたたかな處ところに坐ざして、金かねを溜ため、書しょ

物を讀み、種々な屁理窟を考へ、又酒を（彼は院長の赤い
 鼻を見て）呑んだりして、樂隱居のやうな眞似をしてゐる。一
 言で云へば、貴方は生活と云ふものを見ないので、其れを
 まったし全く知らんです。而して實際と云ふ事を唯理論の上から計り
 推してゐる。だから苦痛を輕蔑したり、何事にも驚かんなど
 と云つてゐられる。其れは甚だ單純な原因に由るのです。
 「空の空」だとか、内部だとか、外部だとか、苦痛や、死に對
 する輕蔑だとか、眞正なる幸福だとか、と那麼言草は、
 皆口シヤの怠惰者に適當してゐる哲學です。で、貴方は恣
 うなのだ、先づ齒が痛むと云ふ農婦が來る……と、其れが奈何し
 たのだ。疼痛は疼痛の事、思想である。且又、病氣が無

くては此の世に生きて行く譯には行かぬものだ。早く歸るべし。
 俺の思想とヴオツ力を呑む邪魔を爲るな。と怗う云ふでせう。又
 或若者が來て奈何云ふ風に生活爲たら可いかと相談を
 掛けられる、と、他人は先づ一番考へる所で有らうが、貴方には
 其答はもう丁と出來てゐる。解悟に向ひなさい、眞正の幸
 福に向ひなさい。と怗云ふです。我々を這價格子の内に監
 禁して置いて苦しめて、而して是は立派な事だ、理窟の有る事
 だ、奈何となれば此の病室と、暖なる書齋との間に何の差
 別もない。と、誠に都合の好い哲學です。而して自分を哲人と
 感じてゐる……いや貴方は是はです、哲學でもなければ、思想で
 もなし、見解の敢て廣いのも無い、怠惰です。自滅です。睡

魔まです！ 左様さやう！』と、イワン、デミトリチは昂然かうぜんとして『貴あ

方なたは苦痛くつうを輕蔑けいべつなさるが、試こころみに貴方あなたの指ゆび一本ぽんでも戸とに挟はさんで御ご

覽らんなさい、然さうしたら聲限こゑかぎり※さけぶでせう。』

『或あるひさけは※さけばんかも知しれません。』と、アンドレイ、エヒミチは言い

ふ。

『那そんなこと様事なは無ない、例たとへば御覽ごらんなさい、貴方あなたが中風ちゆうふうにでも罹かゝつ

たとか、或あるひかりは假ぐしやに愚者じぶんが自みづか分の位置りようを利用して貴方あなたを公然こうぜん辱はづかし

めて置おいて、其それが後のちに何なんの報むくいも無なしに濟すんで了しまつたのを知しつた

ならば、其そのときあなた時貴方たひとは他ひとの人に、解悟かいごに向むかひなさいとか、眞正しんせい

の幸福かうふくに向むかひなさいとか云いふ事ことの効力かうりよくが果はたして、何程なにほどと

云いふことわが解わかりませう。』

『これは奇※だ。』と院長（きばつ）は満足（まんぞく）の餘り微笑（あまびせう）しながら、兩手（りやうて）を擦り（こす）く云ふ。『私は貴方（わたくしあなた）が總て（すべ）を綜合（そうがふ）する傾向（けいかう）を有（も）つてゐるのを、面白（おもしろ）く感じ且（か）つ敬服（けいふく）致したのです、又貴方（またあなた）が今述（いま）べられた私の人物評（わたくしじんぶつひやう）は、唯感心（たゞかんしん）する外（ほか）は有りません。實は私は貴方（じつわたくしあなた）との談話（だんわ）に於て、此上（このうへ）も無い満足（まんぞく）を得（え）ましたのです。で、私は貴方（わたくしあなた）のお話を不殘（はなしのこら）伺（うかが）ひましたから、此度（こんど）は何卒（どうぞ）私（わたし）の話を（はなし）もお聞き下（きくだ）さい。』

（十一）

怏（か）くて後（のち）、猶（なほ）二人（ふたり）の話（はなし）は一時間（じかん）も續（つづ）いたが、其れより院長（りんちやう）長

は深く感動して、毎日、毎晩のやうに六號室に行くので
 あつた。二人は話込んでゐる中に日も暮れて了ふ事が往々有る
 位。イワン、デミトリチは初めの中は院長が野心でも有るの
 では無いかと疑つて、彼に左右遠ざかつて、不愛想にしてゐた
 が、段々慣れて、遂には全く素振を變へたので有つた。
 然るに病院の中では院長アンドレイ、エヒミチが六號
 室に切に通ひ出したのを怪んで、其評判が高くなり、代
 診も、看護婦も、一樣に何の爲に行くのか、何で數時間餘も那
 麼處にゐるのか、甚麼話を爲るので有らうか、彼處へ行つて
 も處方書を示さぬでは無いかと、彼方でも、此方でも、彼が近
 頃の奇なる舉動の評判で持切つてゐる始末。ミハイル、

アウエリヤヌキチは此頃では始終彼の留守に計り行く。ダリユシカは旦那が近頃は定刻に麥酒を吞まず、中食迄も晩れることが度々なので困却つてゐる。

或時六月の末、ドクトル、ハバトフは、院長に用事が有つて、其室に行つた所、居らぬので庭へと探しに出た。すると其處で院長は六號室で有ると聞き、庭から直に別室に入り、玄關の間に立留ると、丁度恁云ふ話聲が聞えたので。

『我々は到底合奏は出来ません、私を貴方の信仰に歸せしむる譯には行きませんから。』
と、イワン、デミトリチの聲。

『現實げんじつと云いふ事は全ことく貴方あなたには解わからんです、貴方あなたは未いまだ嘗かつて苦くるんだ事ことは無ないのですから。然しかし私わたくしは生うまれた其日そのひより今日迄こんにちまで、絶たえず苦痛くつうを嘗なめてゐるのです、其故それゆゑ私わたくしは自分じぶんを貴方あなたよりも高たかいもの、萬事ばんじに於おいて、より多く精せい通つうしてゐるものと認みめて居をります。ですから貴方あなたが私わたくしに教おしへると云いふ場合ばあひで無ないのです。』

『私わたくしは何も貴方あなたを自分じぶんの信しん仰かうに向むかはせやうと云いふ權利けんりを主しゅ張ちやうはせんのです。』院いん長ちやうは自分じぶんを解わかつて呉くれ人ての無ないので、

さも殘念ざんねんと云いふやうに。『然さう云いふ譯わけでは無ないのです、其それは貴方あなたが苦痛くつうを嘗なめて、私わたくしが嘗なめなれないといふことではないのです。詮せんずる所ところ、苦痛くつうも快くわ樂らくも移うつり行ゆくもので、那そんな様こと事は奈何どうでも

いいのです。で、私わたくしが言いはうと思おもふのは、貴方あなたと私わたくしとが思想しきさうする

もの、相共に思想したり、議論を爲たりする力が有るものと認めてゐるといふことです。縦令我々の意見が何の位違つても、此に我々の一致する所があるのです。貴方が若し私が一般の無智や、無能や、愚鈍を何れ程に厭ふて居るかと知つて下すつたならば、又如何なる喜を以て、慫うして貴方と話をしてゐるか云ふ事を知つて下すつたならば！ 貴方は知識の有る人です。』

ハバトフは此時少計り戸を開けて室内を覗いた。イワシ、デミトリチは頭巾を被つて、妙な眼付をしたり、顫上つたり、神経的に病院服の前を合はしたりしてゐる。院長は其のそばに腰を掛けて、頭を垂れて、凝として心細いやうな、悲しいやうな様子で顔を赤くしてゐる。ハバトフは肩を縮めて冷

う
笑し、ニキタと見合ふ。ニキタも同じく肩を縮める。

よくじつ
翌日ハバトフは代診を伴れて別室に来て、
また たちぎ
で又も立聞。
げんくわん
玄關の間

あんちやうどの
『院長殿、とうく發狂と御坐つたわい。』と、ハバト

べつしつ
フは別室を出ながらの話。

しあはれめ
『主憐よ、主憐よ、主憐よ！』と、敬虔なるセルゲイ、セルゲ

い
牛チは云ひながら。ピカくと磨上げた靴を汚すまいと、庭の

みづたまり
水溜を避けく溜息をする。

うちあ
『打明けて申しますとな、エウゲニイ、フエオドロ牛チもう私は

と
疾うから這麼事になりはせんかと思つてゐましたのさ。』

(十二)

其後^{そのご}院^{あん}長^{ちやう} アンドレイ、エヒミチは自分^{じぶん}の周圍^{まはり}の者^{もの}の様^{やう}子の^す、
 ガラリと變^{かは}つた事^{こと}を漸^{やうや}く認^みめた。小使^{こづかひ}、看護婦^{かんごふ}、患者^{くわんじや}等は、
 彼^{かれ}に往^ゆ遇^きふ度^{たび}に、何^{なに}をか問^とふものゝ如^{ごと}き眼付^{めつき}で見^みる、行^ゆき過^すぎて
 からは私語^{さぐや}く。折々^{をりく}庭^{には}で遇^あふ會^{くわいけい}計^が係^{けい}の小娘^{こむすめ}の、彼^{かれ}が愛^{あい}
 してゐた所^{ところ}のマアシヤは、此^この節^{せつ}は彼^{かれ}が微笑^{びせう}して頭^{あたま}でも撫^なでやう
 とすると、急^{いそ}いで遁出^{にげだ}す。郵便局^{ゆうびんきょく}局長^{ちやう}のミハイル、アウエリ
 ヤヌチは、彼^{かれ}の所^{ところ}に來^きて、彼^{かれ}の話を聞^きいてはゐるが、先^{さき}のやう
 に其^それは眞實^{まったく}ですとはもう云^いはぬ。何^{なん}となく心配^{しんぱい}さうな顔^{かほ}で、
 左様^{さやう}々々、々々《く》、と、打濕^{うちしめ}つて云^いつてゐるかと思^{おも}ふと、

やれヴオツカを止せの、麥酒を止めろのと勸初める。又醫員のハ

ットフも時々來ては、何故かアルコール分子の入つてゐる飲

物の止せ。ブローミウム加里を服めと勸めて行くので。

八月にアンドレイ、エヒミチは市役所から、少し相談が有

るに由つて、出頭を願ふと云ふ招状が有つた、で、定

刻に市役所に行つて見ると、もう地方軍令部長を初め、

郡立學校視學官 市役所員、それにドクトル、ハットフ、

又も一人の見知らぬブロンデンの男、ずらりと並んで控へてゐる。

傍にゐた者は直ぐに院長に此の人間を紹介した、猶且ド

クトルで、何だとかと云ふポーランドの云ひ悪い名、此の町から

三十ヴェルスタ計り隔つてゐる、或る育馬所に居る者、今日此

の町まちを何かの用ようで些ちよつと通掛とほりかゝつたので、此この場所ばしょへ立寄たちよつたとのことで。

『えゝ、只今ただいま、足下そくかに御關係ごくわんけいの有ある事柄ことがらで、申上まをしあげたいとおもふのですが。』と、市役所員しやくしよゐんは居並あならぶ人々ひと／＼の挨拶あいさつが濟すむと慥かき切り出だした。『あ、エウゲニイ、フエオドロキチの有おつし仰やるには、本院ほんゐんの藥局やくきよくが狹隘せまいので、之これを別室べつしつの一つに移轉うつしては奈何どうかと云いふのです。勿論もちろんこれ是ざんは雜作なも無い事ことですが、其それには別室べつしつの修繕しうぜんを要えうすると云いふ其事そのことです。』

『左様さやう、修繕しうぜんを致いたさなければならんでせう。』と、院長ゐんちやうは考かんへながら云いふ。『例たとへば隅すみの別室べつしつを藥局やくきよくに當あてやうと云いふには、私わたくかんの考かんでは、極ごくく少額せうがくに見積みつもつても五百圓ゑんは入いりませ

う、然し餘り不生産的な費用です。』

みな すこしもく
皆は少時黙してゐる。 院長は靜に又續ける。

わたくし
『私はもう十年も前から、さう申上げてゐたのですが、全體

此の病院の設立られたのは、四十年代の頃でしたが、其

時分は今日のやうな資力では無かつたもので。然し今日

のところ 病院は、確に市の資力以上の贅澤に爲つてゐる

ので、餘計な建物、餘計な役などで随分費用も多く費つてゐ

るのです。私の思ふには、是丈の錢を費ふのなら、遣り方をさ

へ換へれば、此に二つの模範的の病院を維持する事が出來

ると思ひます。』

『では一つ遣り方を換へて御覽になつたら如何です。』

と、市役所員は活發に云ふ。

『私は前にも申上ました通り、醫學上の事務を地方自治體の方へ、お渡しになつては如何でせう？』

『地方自治に錢を渡したら、其れこそ彼等は皆盗んで了ひませう。』

『と、ブロンヂンのドクトルは笑ひ出す。』

『其りや極つてます。』と、市役所員も同意して笑ふ。

院長は茫然とブロンヂンのドクトルを見たが。『然し公

平に考へなければなりません。』と云ふた。

皆は又少時黙して了ふ。其中に茶が出る。ドクトル、ハバト

フは皆との一般の話の中も、院長の言に注意をして聞いて

ゐたが突然に。『アンドレイ、エヒミチ今日は何日です？』

其それから續つづいて、ハバトフとブロンチンのドクトルとは下手へたなのを感かんじてゐる試験官しけんくわんと云いつたやうな調子てうしで、今日けふは何曜日なにえうびだとか、一年ねんの中うちには何日なんにち有あるとか、六號室がうしつには面白おもしろい豫言よげん者やがゐるさうなとかと、交々かはる／＼たづ尋問たづねねるので有あつた。

院いん長ちやうは終をはりの問とひには赤面せきめんして。『いや、那あれは病人びやうにんです、然しかし面白おもしろい若者わかもので。』と答こたへた。

もう誰たれも何なんとも質問しつもんを爲せぬのである。

院いん長ちやうは玄關げんくわんの間まで外ぐわい套いたうを着き、市役所しやくしよの門もんを出でたが、是これは自分じぶんの才能さいのうを試験しけんする所ところの委員會ゐんくわいで有あつたと初めて悟さとり、自分じぶんに懸かけられた質問しつもんを思おもひ出だし、一人ひと自みづから赤面せきめんし、一生しやうの中うち初めて、醫學いがくなるものを、つくづくと情無なさけない者ものに感かん

じたのである。

其晩、郵便局長のミハイル、

アウエリヤヌチは彼の

所に來たが、挨拶もせず、匆卒彼の兩手を握つて、聲を顫

はして云ふた。

『おゝ君、ねえ、君は僕の切なる意中を信じて、僕を親友と

認めて呉れる事を證して下さるでせうね……え、君！』

彼は院長の云はんとするのを遮つて、何かそわくとして續

けて云ふ。『私は貴方の教育と、高尚なる心とを甚だ敬

愛して居るです。何卒君、私の云ふことを聞いて下さい。醫學

の原則は、醫者等をして貴方に實を云はしめたのです。然しな

がら私は軍人風に眞向に切出します。貴方に打明けて云ひま

す、即ち貴方は病氣なのです。是はもう周圍の者の疾うより認めてゐる所で、只今もドクトル、エウゲニイ、フエオドロキチが云ふのには、貴方の健康の爲には、須く氣晴をして、保養を專一と爲んければならんと。是は實際です。所が、丁度私も此の節、暇を貰つて、異つた空氣を吸ひに出掛けやうと思つてゐる矢先、如何でせう、一所に付合つては下さらんか、而して舊るいことみんなする事を皆忘れて了ひませうぢや有りませんか。』

『然し私は少しも身體に異状は無いです、壯健です。無暗に出掛ける事は出来ません、何卒私の友情を他の事で何とか證させて下さい。』

アンドレイ、エヒミチは初の一分時は、何の意味もなく書物

と離れ、ダリユシカと麥酒とに別れて、二十年來定まつた其
 生活の順序を破ると云ふ事は出来なく思ふたが、又深く
 思へば、市役所で有りし事、其自ら感じた不愉快の事、
 愚かな人々が自分を狂人視してゐる這麼町から、少しでも
 出て見たらば、とも思ふので有つた。
 『然し貴方は一體何處へお出掛けにならうと云ふのです？』院
 長は問ふた。

『モスクワへも、ペテルブルグへも、ワルシヤワへも……ワルシ
 ヤワは實に好い所です、私が幸福の五年間は彼處で送つたの
 でした、其れは好い町です、是非行きませう、ねえ君。』

(十三)

一週間しゅうかんを経てアンドレイ、エヒミチは、病院びやういんから辭職じしよくの勸告くわんこくを受けたが、彼は其れかれに對しては至いたつて平氣へいきであつた。慫慂そうそうして又一週間しゅうかんを過ぎ、遂にミハイル、アウエリヤヌ牛チともと共に郵便いゆうびんの旅馬車たびばしやに打乗うちのり、近き鐵道てつだうのステーションを差さして、旅行りよかうにと出掛けたのである。

空は爽そらはに晴れて、遠く木立こだちの空に接せつする邊も見渡みわたされる涼すずしい日和ひより。ステーション迄までの二百ヴェルスタの道を二晝夜で過すぎたが、其間そのあひだ馬の繼場つぎば々々で、ミハイル、アウエリヤヌ牛チは、やれ、茶の杯ちやこつぷの洗あらひやうが奈何どうだとか、馬うまを附つけるのに手間てまが取とれると

か^{りき}と力^{りき}んで、上^{あげ}句^くには、何^いも黙^{だま}れとか、彼^かれ此^これ云^いふな、とかと
眞^ま赤^{つか}になつて騒^{さわ}ぎを返^{かへ}す。道^{みち}々^くも一^{ふん}分^{ぶん}の絶^{たえ}間^まもな^しく喋^{しゃべ}り續^{つづ}けて、

カ^カフカズ、ポーランドを旅^り行^よしたこ^うなどを話^はす。而^{さう}して大^{おほ}こ

聲^{こゑ}で眼^めを剥^むきだし、夢^む中^{ちゆう}になつてドクトルの顔^{かほ}へはふツくと

息^{いき}を吐^ふ掛^{つか}ける、耳^{みみ}許^{もと}で高^{たか}笑^{わら}する。ドクトルは其^それが爲^{ため}に考^{かんが}

に耽^{ふけ}ることもならず、思^{おも}ひ沈^{しづ}む事^{こと}も出^で来^きぬ。

汽^き車^{しや}は經^{けい}濟^ぎの爲^{ため}に三^{さん}等^{とう}で、喫^{きつ}烟^{えん}を爲^せぬ客^{かく}車^{しや}で行^いつた。車^し

室^{しつ}の中^{うち}はさのみ不^ふ潔^{けつ}の人間^{にんげん}計^{けい}りではなかつたが、ミハイル、

アウエリヤ又^{また}牛^{うし}子^こは直^すに人^{ひと}々^々と懇^{こん}意^いになつて誰^{たれ}にでも話^はを仕^し

掛^かけ、腰^{こし}掛^{かけ}から腰^{こし}掛^{かけ}へ廻^{まは}り歩^{ある}いて、大^{おほ}聲^{こゑ}で、這^{こん}麼^な不^ふ都^と合^が極^{きふ}

る汽^き車^{しや}は無^ないとか、皆^{みな}盜^{ぬす}人^{びと}のやうな奴^{やつ}等^ら計^{けい}りだとか、乗^じ馬^{うば}

で行けば一日に百ヴェルスタも飛ばせて、其上愉快に感じられるとか、我々の地方の不作なのはピン沼などを枯して了つたからだ、非常な亂暴をしたものだとか、などと云つて、殆ど他には口も開かせぬ、而して其相間には高笑と、仰山な身振。

『私等二人の中、何れが瘋癲者だらうか。』と、ドクトルは腹立しくなつて思ふた。『少しも乗客を煩はさんやうに務めてゐる俺か、其れとも這麼に一人で大騒をしてゐた、誰にも休息も爲せぬ此の利己主義男か?』

モスクワへ行つてから、ミハイル、アウエリヤ又中子は肩章の無い軍服に、赤線の入つたツボンを穿いて町を歩くに

も、軍帽ぐんぼうを被りかぶ、軍人ぐんじんの外ぐわいたう套きを着た。兵卒へいそつは彼かれを見て
 敬禮けいれいをする。アンドレイ、エヒミチは今初めて氣きが着ついたが、
 ミハイル、アウエリヤヌキは前さきに大地主おほぢぬしで有あつた時の、餘りあま
 感心かんしんせぬ風計ふうばかりが今も残のこつてゐると云いふことを。机つくゑの前まへにマ
 ツチは有あつて、彼かれは其それを見てゐながら、其癪そのくせ、大聲おほごゑを上げ
 て小使こづかひを呼よんでマツチを持もつて來こいなどと云いひ、女ぢよちゆう中ちゆうのゐ
 る前まへでも平氣へいきで下着したぎ一つで歩いてゐる、下僕しもべや、小使こづかひを捉つかまへて
 は、年としを寄よつたものでも何なんでも構かまはず、貴様きさま々と頭あたま碎こなし。其
 の上うへに腹はらを立たつと直すぐに、此この野郎やらう、此この大馬鹿おほばかと惡體あくたいが初はじま
 るので、是等これらは大地主おほぢぬしの癖くせであるが、餘り感心あまかんしんした風ふうでは無
 い、とドクトルも思おもふたのであつた。

モスクワ見物の第一着に、ミハイル、アウエリヤ又牛チは其
 友を先づイウエルスカヤ小聖堂に伴れ行き、其處で彼は熱
 心に伏拜して涙を流して祈禱する、而して立上り、深く溜
 息して云ふには。

『縱令信じなくとも、祈禱をすると、何とも云はれん位、心が安
 まる、君、接吻爲給へ。』

アンドレイ、エヒミチは體裁悪く思ひながら、聖像に接
 吻した。ミハイル、アウエリヤ又牛チは唇を突出して、頭を振
 りながら、又も小聲で祈禱して涙を流してゐる。其れから二人は
 其處を出て、クレムリに行き、大砲王（巨大な砲）と大鐘
 王（巨大な鐘、モスクワの二大名物）とを見物し、指で觸つ

て見たりした。其れよりモスクワ川向の町の景色などを見渡しながら、救世主の聖堂や、ルミヤンツセフの美術館な
 んどを廻つて見た。

中食はテストフ亭と云ふ料理店に入つたが、此でもミハ
 イル、アウエリヤヌ牛チは、頬鬚を撫でながら、暫少時、品
 書を拈轉つて、料理店を我が家のやうに舉動ふ愛食家風の
 調子で。

『今日は甚麼御馳走で我々を食はして呉れるか。』と、無暗と
 幅を利かせたがる。

(十四)

ドクトルは見物もし、歩いても見、食つても飲んでも見たの
 であるが、たゞもう毎日ミハイル、アウエリヤ又牛チの舉動
 に弱られ、其れが鼻に着いて、嫌で、嫌でならぬので、如何か
 して一日でも、一時でも、彼から離れて見たく思ふので有つたが、
 友は自分より彼を一步でも離す事はなく、何でも彼の氣晴をす
 るが義務と、見物に出ぬ時は饒舌り續けて慰めやうと、附纏
 ひ通しの有様。二日と云ふもののアンドレイ、エヒミチは堪へ堪
 へて、我慢をしてゐたのであるが、三日目にはもう如何にも堪へ
 切れず。少し身體の工合が悪いから、今日丈け宿に残つてゐると、
 遂に思切つて友に云ふたので有つた、然るにミハイル、アウエ

リヤ又牛チは、其れぢや自分も家にある事に爲やう、少しは休
 息も爲なければ足も續かぬからと云ふ挨拶。アンドレイ、エ
 ヒミチはうんざりして、長椅子の上に横になり、倚掛の方へ
 突と顔を向けた儘、齒を切つて、友の喋喋語るのを詮方なく
 聞いてゐる。然りとも知らぬミハイル、アウエリヤ又牛チは、大
 得意で、佛蘭西は早晩獨逸を破つて了ふだらうとか、モスク
 ワには攫客が多いとか、馬は見掛計りでは、其眞價は解らぬ
 ものであるとか。と、其れから其れへと話を續けて息の繼ぐ暇も
 無い、ドクトルは耳がガンとして、心臓の鼓動さへ烈しくなつ
 て来る。と云つて、出て行つて呉れ、黙つてゐて呉れとは彼には
 言はれぬので、凝と辛抱してゐる辛さは一倍である。所が仕

合せにもミハイル、アウエリヤヌ牛チの方はうが、此度こんどは宿やどに引込ひっこんでゐるのが、とうとう退屈たいくつになつて來きて、中食後ちゆうじきごには散歩さんぽに出掛でかけて行いつた。

アンドレイ、エヒミチはやつと一人ひとりになつて、長椅子ながいすの上うへにのろくおちつと落着よこいて横になる。室内しつないに自分じぶん唯一たゞひとり一人、と意識いしきするのは如何いかに愉快ゆくわいで有あつたらう。眞實しんじつの幸福かうふくは實じつに一人ひとりでなければ得うべからざるもので有あると、つく／＼お思もふた。而さうして彼かれは此頃このごろ見みたり、聞きいたりした事を考ことへやうと思おもふたが、如何どうしたものか猶やはり且なり、ミハイル、アウエリヤヌ牛チが頭あたまから離はなれぬので有あつた。

其その後のちは彼かれは少すこしも外出ぐわいしゆつせず、宿やどに計ばかり引込ひっこんでゐた。

友は態々休暇を取つて、恁く自分と共に出發したのでは
 無いか。深き友情によつてゝは無いか、親切なのでは無い
 か。然し實に是程有難迷惑の事が又と有らうか。降參だ、
 眞平だ。とは云へ、彼に惡意が有るのでは無い。と、ドクトル
 は更に又沁々と思ふたので有つた。

ペテルブルグに行つてからもドクトルは猶且同様、宿にのみ
 引籠つて外へは出ず、一日長椅子の上に横になり、麥酒を呑む
 時に丈け起る。

ミハイル、アウエリヤヌチは、始終ワルシヤワへ早く行かう
 と計り云ふてゐる。

『然し君、私は何もワルシヤワへ行く必要は無いのだから、君

ひとり ひとり 一人で行き給へ、而して私を何卒先に故郷に歸して下さい。』

アンドレイ、エヒミチは哀願 あいぐわん するやうに云ふた。

『飛だ事さ。』と、ミハイル、アウエリヤ又牛子は聽入れぬ。

『ワルシヤワこそ君に見せにやならん、僕が五年の幸福な生涯 がいのく を送つた所だ。』

アンドレイ、エヒミチは例の氣質で、其れでもとは云ひ兼ね、

遂に又嫌々ながらワルシヤワにも行つた。其處でも彼は宿から

出ずに、終日 しゆうじつ 相變らず長椅子の上に轉がり、相變らず友

の舉動に愛想を盡かしてゐる。ミハイル、アウエリヤ又牛子

は一人して元氣可く、朝から晩迄町を遊び歩き、舊友を尋ね

廻り、宿には數度も歸らぬ夜が有つた位。と、或朝早く非常

に興奮した様子で、眞赤な顔をし、髪も茫々として宿に歸つて來た。而して何か獨語しながら、室内を隅から隅へと急いで歩く。

『名譽は大事だ。』

『然うだ名譽が大切だ。全體這麼町に足を踏込んだのが間違ひだつた。』と、彼は更にドクトルに向つて云ふた。『實は私は負けたのです。で、奈何でせう、錢を五百圓貸しては下さらんか？』

アンドレイ、エヒミチは錢を勘定して、五百圓を無言で友に渡したのである。ミハイル、アウエリヤ又中子は未だ眞赤になつて、面目無いやうな、怒つたやうな風で。『屹度返却します、

屹度。^{きつと}』などと誓^{ちか}ひながら、又帽^{またぼう}を取るなり出^でて行^いつた。が、大^お

約^{ほよそ}二時間^{じかん}を經^たつてから歸^{かへ}つて來^きた。

『お蔭^{かげ}で名譽^{めいよ}は助^{たす}かつた。もう出^{しゅつ}發^{ぱつ}しませう。這麼不徳義極^{こんなふとくぎはま}

る所^{ところ}に一分^{ぶん}だつて留^{とど}まつてゐられるものか。掏摸^{すり}ども奴^め、喫^{あう}探^{たん}ど

も奴^め。』

二人^{ふたり}が旅行^{りょかう}を終^をへて歸^{かへ}つて來^きたのは十一月^{ぐわつ}、町^{まち}にはもう深雪^{みゆき}

が眞白^{まつしろ}に積^{つも}つてゐた。アンドレイ、エヒミチは歸^{かへ}つて見^みれば自^じ

分の位置^{ぶん}は今^{いま}はドクトル、ハバトフの手^てに渡^{わた}つて、病院^{びやういん}の官^く

宅^{わんたく}を早^{はや}く明渡^{あけわた}すのをハバトフは待^まつてゐるといふとの事^{こと}、

又^{また}其^その下女^{げぢよ}と名^なづけてゐた醜婦^{しうふ}は、此^この間^{あひだ}から、別室^{べつしつ}の内^{うち}の或^あ

る處^{ところ}に移轉^{いてん}した。町^{まち}には、病院^{びやういん}の新院長^{しんいんちやう}に就^ついての種^{いろ}

うはさ
々な噂が立てられてゐた。下女と云ふ醜婦が會計と喧嘩
をしたとか、會計は其女の前に膝を折つて謝罪したと
か、と。

アンドレイ、エヒミチは歸來早々先づ其住居を尋ねねばな
らぬ。

『不遠慮な御質問ですがなあ君。』と郵便局長はアンド
レイ、エヒミチに向つて云ふた。

『貴方は何位財産をお所有ちですか？』

問はれて、アンドレイ、エヒミチは黙した儘、財囊の錢を數へ
見て。『八十六圓。』

『否、然うぢやないのです。』ミハイル、アウエリヤヌキチは更

に云^{いひ}直^{なほ}す。『其^その、君^{きみ}の財^{ざい}産^{さん}は總^{そう}計^{けい}で何^{どの}位^{くらゐ}と云^いふのを伺^{うか}うのさ。』

『だから總^{そう}計^{けい}八^{はち}十^{じゅう}六^{りく}圓^{えん}と申^{まを}してゐるのです。其^{それ}切^ぎり私^{わたし}は一^{いっ}文^{もん}も所有^もつちや居^をらんのぞ。』

ミハイル、アウエリヤヌ牛^{うし}手^てはドクトル^{れんけつ}の廉^{しやう}潔^{ぢき}で、正^{しやう}直^{ぢき}で有^あるのは豫^{かね}ても知^しつてゐたが、然^{しか}し其^それにしても、二^{ふた}萬^{まん}圓^{えん}位^{くらゐ}は確^{たしか}に所有^もてゐることゝの思^{おも}ふてゐたのに、恠^かくと聞^きいては、ドクトル^くが恰^{まる}で乞^こ食^{じき}にも等^{ひと}しき境^{きやう}遇^{ぐう}と、思^{おも}はず涙^{なみだ}を落^おして、ドクトル^くを抱^{いだ}き締^しめ、聲^{こゑ}を上げ^あて泣^なくので有^あつた。

ドクトル、アンドレイ、エヒミチはベローワと云ふ婦の小汚な
 い家の一間を借りることになつた。彼は前のやうに八時に起きて、
 茶の後は直に書物を楽しんで讀んでゐたが、此の頃は新しい書
 物も買へぬので、古本計り讀んでゐる爲か、以前程には興
 味を感じぬ。或時徒然なるに任せて、書物の明細な
 目録を編成し、書物の背には札を一一貼付けたが、這麼
 機械的な單調な仕事か、却つて何故か奇妙に彼の思想を弄し
 て、興味をさへ添へしめてゐた。

彼は其後病院に二度イワン、デミトリチを尋ねたので有る
 がイワン、デミトリチは二度ながら非常に興奮して、激昂

してゐた様子で、饒舌る事はもう飽きたと云つて彼を拒絶する。
 彼は詮方なくお眠みなさい、とか、左様なら、とか云つて出て
 来やうとすれば、『勝手にしやがれ。』と怒鳴り付ける權幕。
 ドクトルも其れからは行くのを見合はせてはゐるものゝ、猶且行
 き度く思ふてゐた。

前には彼は中食後は、屹度室の隅から隅へと歩いて考へに沈ん
 であるのが常で有つたが、此の頃は中食から晩の茶の時迄は、
 長椅子の上に横になる。と、毎も妙な一つ思想が胸に浮ぶ。其れ
 は自分が二十年以上も勤務を爲てゐたのに、其れに對して養
 老金も、一時金も呉れぬ事で、彼は其れを思ふと殘念で有つ
 た。勿論餘り正直には務めなかつたが、年金など云ふも

のは、縦令、正直しやうちきで有らうが、無からうが、凡て務めた者は
 受けべきで有る。勳章だとか、養老金だとか云ふものは、
 徳義上の資格や、才能などに報酬されるのではなく、一般
 に勤務其物に對して報酬されるので有る。然らば何で自分
 計り報酬をされぬので有らう。又今更考へれば旅行に由
 りて、無慘々々と惜ら千圓を費ひ棄てたのは奈何にも残念。酒
 店には麥酒の拂が三十二圓も滞る、家賃とても其通り、ダリユ
 シカは密に古服やら、書物などを賣つてゐる。此際彼の千
 圓でも有つたなら、甚麼に役に立つ事かと。
 彼は又恠る位置になつてからも、人が自分を抛棄つては置い
 て呉れぬのが、却つて迷惑で残念で有つた。ハバトフは折

々病氣びやうきの同僚どうれうを訪問はうもんするのは、自分の義務ぎむで有るかのや
 うに、彼の所かれところに蒼蠅そうそうく来る。彼はハバトフが嫌いやでならぬ。其満そのまん
 足よくな顔かほ、人ひとを見下みさげるやうな様子やうす、彼かれを呼よんで同僚どうれうと云ふ言ことば、
 深ふかい長靴ながぐつ、此等これらは皆氣障みなきざでならなかつたが、殊ことしやくさはに癩かさに障るのは、
 彼かれを治療ちれうする事ことを自分の務つとめとして、眞面目まじめに治療ちれうをしてゐる意つもりな
 のが。で、ハバトフは訪問はうもんをする度たびに、屹度きつとブローミウム加里カリ
 の入はいつた壘びんと、大黃だいおうの丸ぐわん薬やくとを持もつて來くる。

ミハイル、アウエリヤヌ中やはり且しよつちゆう、初中終しよつちゆう、アンドレイ、
 エヒミチを訪問たづねて來きて、氣晴きばらしを爲させることが自分の義務ぎむと心
 得とろえてゐる。で、來くると、宛然まるで空そら々／＼しい無理むりな元氣げんきを出だして、
 強しひて高たか笑わらひをして見みたり、今日けふは非ひ常じやうに顔かほ色いろが好いいか、

何^{なん}とか、ワルシヤワの借^{しゃく}金^{きん}を拂^{はら}はぬので、内^{ない}心^{しん}の苦^{くる}しく有^あ
 るのと、恥^{はづか}しく有^ある所^{ところ}から、餘^{よけい}計^{けい}に強^しひて氣^きを張^はつて、大^{おほ}聲^{こゑ}で
 笑^{わら}ひ、高^{たか}調^{てう}子^しで饒^{しやべ}舌^べるので有^あるが、彼^{かれ}の^{はなし}話^わにはもう倦^{うんざ}厭^ぎりして
 ゐるアンドレイ、エヒミチは、聞^きくのもなかくに大^{たい}儀^ぎで、彼^{かれ}が
 來^くると何^い時^つもくるりと顔^{かほ}を壁^{かべ}に向^むけて、長^{なが}椅^い子^すの上^{うへ}に横^{よこ}になつた
 切^きり、而^{さう}して齒^はを切^きつてゐるのであるが、其^それが段^{だん}々^く度^{たび}重^{かさ}な
 れば重^{かさ}な程^{ほど}、堪^{たま}らなく、終^{つひ}には咽^{のど}喉^{あた}の邊^{あた}りまでがむづ／＼して來^く
 るやうな感^{かん}じがして來^きた。

(十六)

あるひいうびんきよくちやう
或日郵便局長ミハイル、アウエリヤヌキチは、中食後

にアンドレイ、エヒミチの所を訪問した。アンドレイ、エヒミ

チは猶且例の長椅子の上。すると丁度ハバトフもブローミウム

カリびんたづさや加里の壇を携へて遣つて來た。アンドレイ、エヒミチは重さうに、

辛さうに身を起して腰を掛け、長椅子の上に兩手を突張る。

『いや今日は、おゝ君は今日は顔色が昨日よりも又ずツと可

いですよ。まづ結構だ。』と、ミハイル、アウエリヤヌキチは

挨拶する。

『もう全快しても可いでせう。』とハバトフは欠をしながら

言を添へる、

『平癒りますとも、而してもう百年も生きまさあ。』と、郵便

局長は愉快氣に云ふ。

『百年ねんてさうも行ゆかんでせうが、二十年ねんや其邊そこらは生き延のびますよ

。』ハバトフは慰なぐさめ顔がほ。『何なんんでも有ありませんさ、なあ同僚どうれう。

悲觀ひくわんももう大抵たいていになさるが可いいですぞ。』

『我々われくは未だ隱居いんきよするには早はやいです。ハ、ハ、左様さうでせうドク

トル、未だ隱居いんきよするのには。』郵便局長いうびんきよくちやうは云ふ。

『來年邊らいねあたりはカフカズへ出掛でかけやうぢや有ありませんか、乗馬じようばで

以てからに彼方あちこち此方こなたを驅廻かけまはりませう。而さうしてカフカズから歸かへつ

たら、此度こんどは結婚けつこんの祝宴しゆくえんでも舉あげるやうになりませう。』

と片眼かためをパチ／＼して。『是非ぜひ一つ君きみを結婚けつこんさせやう……ねえ、

結婚けつこんを。』

アンドレイ、エヒミチはむかつとして立上つた。たちあが

『失敬な！』と、一言※ぶなりドクトルは窓の方に身を退け。しつげい ひとことさけ まどはう みよ

『全體貴方々は這麼失敬な事を言つてゐて、自分では氣がぜんたい あなたがた こんなしつげい こと じぶん き

着かんのですか。』つ

柔かに言ふ意で有つたが、意に反して荒々しく拳をも固めてやはら いつもり あ はん あらく こぶし かた

頭上かしらのうへに振翳した。ふりかげ

『餘計な世話は焼かんでも可い。』益 《ますく》荒々しくよけい せわ や さい ますます あらく

なる。

『二人ながら歸つて下さい、さあ、出て行きなさい。』ふたり かへ くだ さあ、 で ゆ

自分の聲では無い聲で顫へながら※ぶ。じぶん こゑ な こゑ ふる さけ

ミハイル、アウエリヤヌ牛チとハバトフとは呆氣に取られて嘔あつけ と みつ

めてゐた。

『二人とも、さあ出ておいでなさい。さあ。』アンドレイ、エヒ

ミチは未だ※び續けてゐる。『鈍痴漢の、薄鈍な奴等、薬も

へちまも有るものか、馬鹿な、輕擧な！』ハバトフと郵便

局長とは、此の權幕に辟易して戸口の方に狼狽出て行

く。ドクトルは其後を睨めてゐたが、匆卒ブローミウム加里の壇

を取るより早く、發矢と計り其處に投付る、壇は微塵に粉碎し

て了ふ。

『畜生！ 行け！ さツさで行け！』と彼は玄關迄駈出

して、泣聲を上げて怒鳴る。『畜生！』

客等が立去つてからも、彼は一人で未だ少時惡體を吻いて

る。然ししか段々だん／＼と落着おちつくに隨したがつて、有繫さすがにミハイル、アウエリ
 ヤヌチに對たいしては氣きの毒どくで、定めさだめし恥入はぢいつてゐる事ことだらうと思おも
 へば。あゝ思慮しりよ、知識ちしき、解悟かいご、哲學者てつがくしやの自若じやく、夫れ將はた安いづく
 かに在あると、彼かれは只管ひたすらに思おもふて、慙はぢて、自みづから赤面せきめんする。
 其夜そのよは慙恨ざんこんの情じやうに驅かられて、一睡すゐだも爲せず、翌朝よくてうひ遂いに意けつを決
 して、局長きよくちやうの所ところへと詫わびに出掛でかける。

『いやもう過去くわこは忘れわすれませう。』と、ミハイル、アウエリヤヌチ
 ちは固かたく彼かれの手てを握にぎつて云いふた。『過去くわこの事ことを思おもひ出だすものは、
 りやうがくじ眼くじを抉くつて了しまひませう。リュバフキン！』と、彼かれは大聲おほごゑ
 で誰たれかを呼よぶ。郵便局いうびんきよくの役員やくゐんも、來合きあはしてゐた人ひと々々
 も、一齊せいに吃驚びつくりする。『椅子いすを持もつて來こい。貴様きさまは待まつて居をれ

。』と、彼は格子越に書留の手紙を彼に差出してゐる農婦に怒鳴り付ける。『俺の用の有るのが見えんのか。いや過去は思ひ出

しますまい。』と彼は調子を一段と柔しくしてアンドレイ、エヒミチに向つて云ふ。『さあ君、掛け給へ、さあ何卒。』

一分間黙して兩手で膝を擦つてゐた郵便局長は又云出した。

『私は決して君に對して立腹は致さんので、病氣なれば據無いのです、お察し申すですよ。昨日も君が逆上られた後、私

はハバトフと長いこと、君のことを相談しましたがね、いや君も此度は本氣になつて、病氣の療治を遣り給はんと可かんです。私は友人として何も彼も彼も打明けます。』と、彼は更に續けて。

『全體君は不自由な生活せいくわつをされてゐるので、家と云へば清潔せいせつでなし、君の世話せわをする者は無し、療治れうちをするには錢ぜには無し。ねえ君、で我々われわれは切せつに君に勸めるのだ。何卒どうぞ是非ぜひ一つ聽きいて頂いたゞきたい、と云ふのは、實じつは然云さういふ譯わけであるから、寧君むしきみは病院びやうあんに入はいられた方が得策とくさくであらうと考へたのです。ねえ君、病院びやうあんは未だ比較ひかくてき的、食物しょくもつは好よし、看護婦かんごふはゐる、エウゲニイ、フエオドロキチもゐる。其それは勿論もちろん、是これは我々丈われわれの話ななしだが、彼かれは餘あまり尊敬そんけいをすべき人格じんかくの男をとこでは無いが、術じゆつに掛けては又またなかく侮あなどられんと思ふ。で願ねがはだ、君きみ、何卒どうぞ一つ充じゆうぶん分に彼かれを信しんじて、療治れうちを專一せんにして頂いたゞきたい。彼かれも私わたしに屹度君きつときみを引受ひきうけると云いつてゐたよ。』

アンドレイ、エヒミチは此の切なる同情の言と、其上涙をさへ頬に滴らしてゐる郵便局長の顔とを見て、酷く感動して徐に口を開いた。

『君は彼等を信じなさるな。嘘なのです。私の病氣と云ふのは抑々うなのです。二十年來、私は此の町にゐて唯一人の智者に遇つた。所が其れは狂人で有ると云ふ、是丈の事實です。で私も狂人にされて了つたのです。然しなあに私は奈何でも可いので、からして畢竟何にでも同意を致しませう。』

『病院へお入りなさい、ねえ君。』

『左様、奈何でも可いです、縦令穴の中に入るのでも。』

『で、君は萬事エウゲニイ、フエオドロキチの言に従ふやうに、』

ねえ君、頼むから。』

『宜しい、私は今は實以て二ちも三ちも行かん輪索に陥没つて了つたのです。もう萬事休矣です覺悟はしてゐます。』

『いや屹度平癒ですよ。』

格子の外には公衆が次第に群つて来る。アンドレイ、エヒ

ミチは、ミハイル、アウエリヤ又牛子の公務の邪魔を爲るのを恐れて、話は其丈にして立上り、彼と別れて郵便局を出た。

丁度其日の夕方、ドクトル、ハバトフは例の毛皮の外套に、深い長靴、昨日は何事も無かつたやうな顔で、アンドレ

イ、エヒミチを其宿に訪問ねた。

『貴方に少々お願いが有つて出たのですが、何卒貴方は私と一つ

立ちあひしんさつ
立合診察を爲ては下さらんか、如何でせう。』と、然り氣な
くハバトフは云ふ。

アンドレイ、エヒミチはハバトフが自分を散歩に誘つて氣晴
を爲せやうと云ふのか、或は又自分に那樣仕事を授けやうと云
ふつもりか、考へて、左に右服を着換へて共に通に出たのである。

彼はハバトフが昨日の事は臆にも出さず、且つ氣にも掛けてゐぬ
やうな様子を見て、心中一方ならず感謝した。這麼非
文明的な人間から、恚る思遣りを受けやうとは、全く意
外で有つたので。

『貴方の有仰る病人は何處なのです？、』アンドレイ、エ
ヒミチは問ふた。

『病院びやうゐんです、もう疾とうから貴方あなたにも見て頂みき度たいと思おもつてゐま

したのですが……妙めうな病びやう人にんなのです。』

施やがて病院びやうゐんの庭にはに入り、本院ほんゐんを一ひと周まはりして瘋癲病ふうてんびやうしや者者

の入れられたる別室べつしつに向むかつて行いつた。ハバトフは其その間あひだ何なに

故ゑか黙もくした儘まま、さツさと六號室がうしつへ這入はひつて行いつたが、ニキタ

は例れいの通とほり雜具がらくたの塚つかの上うへから起おきあ上あつて、彼等かれらに禮れいをする。

『肺はいの方ほうから來きた病びやう人にんなのですから。』とハバトフは小聲こゝろゑで

云いふた。『や、私は聽診器わたしちやうしんきを忘わすれて來きた、直すぐ取とつて來きますか

ら、些ちよつと貴方あなたは此處こゝでお待ち下ください。』

と彼は安ドレイ、エヒミチを此こゝに一人殘ひとりして立去たちざつた。

(十七)

日は已に没した。イワン、デミトリチは顔を枕に埋めて寢臺の上うへに横になつてゐる。中風患者は何か悲しうに靜に泣きながら、唇を動かしてゐる。肥つた農夫と、郵便局員とは眠つてゐて、六號室の内は闇として靜かであつた。

アンドレイ、エヒミチは、イワン、デミトリチの寢臺の上に腰を掛けて、大約半時間も待つてゐると、室の戸は開いて、入つて來たのはハバトフならぬ小使のニキタ。病院服、下着、上靴うはぐつ杯、小腋こわきに抱へて。

『何卒閣下是をお召し下さい。』と、ニキタは前院長の前に

立つて丁寧ていねいに云いふた。『那あれが閣下かくかのお寢臺ねだいで。』と、彼は更さらに
 新あらしく置おかれた寢臺ねだいの方ほうを指さして。『何なんでも有ありませんです。必かならず
 直すぐに御全快ごぜんくわいになられます。』

アンドレイ、エヒミチは是こゝに至いたつて初はじめて讀よめた。一言ごんも言いは
 ずには彼かれはニキタの示しめした寢臺ねだいに移うつり、ニキタが立たつて待まつてゐる
 ので、直すぐに着きてゐた服ふくをすツぽりと脱ぬぎ棄すて、病びやう院うゐん服ふくに着き
 換かへて了しまつた。シヤツは長ながし、ツボン下したは短みじかし、上着うはぎは魚さかなの焼や
 いた臭におひがする。『屹度間きつとまもなくお直なほりでせう。』と、ニキタは復また
 云いふてアンドレイ、エヒミチの脱ぬぎ捨すてた服ふくを一ひと纏まとめにして、小
 腋わきに抱かかへた儘まま、戸とを閉たて、行ゆく。
 『奈何どうでも可いい……。』と、アンドレイ、エヒミチは體裁惡きまりわるさう

に病院服びやうゐんふくの前まへを搔合かきあはせて、さも囚人しうじんのやうだと思ひながら、『奈何どうでも可いいわ……燕尾服えんびふくだらうが、軍服ぐんぷくだらうが、此この病院服びやうゐんふくだらうが、同じ事おな ことだ。』
 『然しかし時計とけいは奈何どうしたらう、其それからポツケツトに入れて置おいたてぢやう手帳てぢやうも、巻まきたばこ、莨もも、や、ニキタはもう着物きものを悉皆のこらず持つて行いつた。いや入いらん、もう死しぬ迄まで、ヅボンや、チヨツキ、長靴ながぐつには用ようが無ないのかも知しれん。然しかし奇妙きめうな成行なりゆきさ。』と、アンドレイ、エヒミチは今いまも猶なほ此この六號室がうしつと、ベローワの家いへと何なんの異かはりも無ないと思おもふてゐたが、奈何どう云いふものか、手足てあしは冷ひえて、顫ふるへてイワン、デミトリチが今いまにも起おきて自じ分ぶんの此この姿すがたを見みて、何なんとか思おもふだらうと恐おそしいやうな氣きもして、立たつたり、居ゐたり、又立またつたり、

ある
歩いたり、やうやく半時間、一時間計も坐つてゐて見たが、
かな ほどたいくつ
悲しい程退屈になつて來て、奈何して這麼處に一週間と
られやう、況して一年、二年など到底辛棒をされるものでな
いと思ひ付いた。さう思へば益 《ますく》居堪らず、衝と立
つて隅から隅へと歩いて見る。『さうしてから奈何する、あゝ到
うてゐたゝま
底居堪らぬ、這麼風で一生！』
かれ
彼はどつかり坐つた、横になつたが又起直る。而して袖で額
なが ひやあせ ふ
に流れる冷汗を拭いたが顔中焼魚の腥い臭がして
きた。かれ まある だ
來た。彼は又歩き出す。『何かの間違ひだらう……話合つて見
にや解らん、屹度誤解が有るのだ。』
イワン、デミトリチはふと眼を覺し、脱然とした様子で兩の

拳こぶしを頬ほに突つく。唾つばを吐はく。初はめ些ちと彼かれには前ぜん院あん長ちやうに氣きが付つかぬやうで有あつたが施やがて其それと見みて、其その寐ね惚ぼ顔がほには忽たちち冷まれ笑いが浮せうんだので。

『あゝ貴方あなたも此こゝへ入いられましたのですか。』と彼かれは噎しれた聲こゑで片眼かためを細ほそくして云いふた。『いや結構けつこう、散さん々／＼人の血ちを慫かうして吸すつたから、此度こんどは御自分ごじぶんの吸すはれる番ばんだ、結構けつこう々々。』
 『何なにかの多分たぶん間違まちがひです。』とアンドレイ、エヒミチは肩かたを縮ちぢめて云いふ。『間違まちがひに相違さうあい değildir。』

イワン、デミトリチは又またも床ゆかに唾つばを吐はいて、横よこになり、而さうして眩つばやいた。『えゝ、生甲斐いきがひの無ない生せい活くわつだ、如何いかにも殘念ざんねんな事ことだ、此この苦痛くつうな生せい活くわつがオペラにあるやうな、アポテオズで終をは

るのではなく、是これがあゝ死しで終をはるのだ。非人ひにんが來きて、死者ししやの手てや、
 足あしを捉とらへて穴あなの中なかに引ひきこ込んで了しまふのだ、うツふ！ だが何なんでもな
 い……其その換かはり俺おれは彼あの世よから化ばけて來きて、此處こゝらの奴等やつらを片かたツ
 端ぱしから嚇おどして呉くれる、皆みんな白髮むらがにして了しまつて遣やる。』
 折をりしもモイセイカは外そとから歸かへり來きたり、其處そこに前院長ぜんゐんちやうのゐる
 のを見みて、直すぐに手てを延のばし、
 『一錢せんお呉くんなさい！』

(十八)

アンドレイ、エヒミチは窓まどの所ところに立たつて外そとを眺ながむれば、日ひはも

うとツぷりと暮れ果てゝ、那方の野廣い畑は暗かつたが、左の方
 の地平線ちへいせんじやう上より、今しも冷たい金色こんじきの月が上る所、病
 院いんの堀へいから百歩計りの處ところに、石の牆いしの繞めぐらされた高い、白い家
 が見える。是は監獄かんごくで有る。

『是が現實これげんじつと云ふものか。』アンドレイ、エヒミチは思はず慄
 然とした。

凄然せいぜんたる月つき、堀の上の釘うへくぎ、監獄かんごく、骨焼場の遠い焰とほほのほ、アン
 ドレイ、エヒミチは有繫さすがに薄氣味悪い感うすきみわるかんに打たれて、しよんぼり
 と立つてゐる。と直後すぐうしろに、吐ほつと計り溜息ためいきの聲こゑがする。振
 返れば胸むねに光る徽章ひかきしやうやら、勳章くんしやうやらを下さげた男をとこが、ニヤ
 リと計り片眼しばかをパチくと、自分じぶんを見て笑ふ。

アンドレイ、エヒミチは強^しひて心^{こゝろ}を落^{おち}着^つけて、何^{なん}の、月^{つき}も、監^か
 獄^{ごく}も其^それが奈^{どう}何^うなのだ、壯^{さう}健^{けん}な者^{もの}も勳^{くん}章^{しやう}を着^つけてゐるで
 はないか。と、然^さう思^{おも}ひかへ返^{かへ}したものゝ、猶^{やは}且^り失^し望^{つばう}は彼^{かれ}の心^{こゝろ}に
 愈^い《いよゝゝ》募^つつて、彼^{かれ}は思^{おも}はず兩^{りやう}の手^てに格^{かう}子^しを捉^{とら}へ、力^{ちから}
 儘^{まか}せに揺^ゆ動^{すぶ}つたが、堅^{けん}固^こな格^{かう}子^しはミチリとの音^{おと}も爲^せぬ。
 荒^{くわう}涼^{りやう}の氣^きに打^うたれた彼^{かれ}は、何^{なに}かなして心^{こゝろ}を紛^{まぎ}らさんと、イ
 ワン、デミトリチの寐^ね臺^{だい}の所^{ところ}に行^いつて腰^{こし}を掛^{かけ}る。
 『私^{わたくし}はもう落^が膽^{つかり}して了^{しま}ひましたよ、君^{きみ}。』と、彼^{かれ}は顫^{ふる}聲^{へい}し
 て、冷^{ひや}汗^{あせ}を拭^ふきながら。『全^まく落^が膽^{つかり}して了^{しま}ひました。』
 『では一^てつ哲^{てつ}學^{がく}の議^ぎ論^{ろん}でもお遣^やんなさい。』と、イワン、デミ
 トリチは冷^{れい}笑^{せう}する。

『あゝ絶體絶命……然うだ。何時か貴方は露西亞には哲學
 は無い、然し誰も、彼も、丁斑魚でさへも哲學をすると有仰
 つたつけ。然し丁斑魚が哲學をすればつて、誰にも害は無いの
 でせう。』アンドレイ、エヒミチは奈何にも情無いと云ふやう
 な聲をして。『奈何して君、那樣に可い氣味だと云ふやうな笑
 樣をされるのです。幾ら丁斑魚でも満足を得られんなら、哲
 學を爲すには居られんでせう。苟も智慧ある、教育ある、自
 尊ある、自由を愛する、即ち神の像たる人間が。唯に醫者とし
 て、邊鄙なる、蒙昧なる片田舎に一生、堰や、蛭や、芥子粉
 だのを弄つてゐるより外に、何の爲す事も無いのでせうか、詐欺、
 愚鈍、卑劣漢、と一所になつて、いやもう！』

『くだらん事を貴方は零して居なさる。醫者が不好なら大臣にでもなつたら可いでせう。』

『いや、何處へ行くのも、何を遣るのも望まんです。考へれば意氣地が無いものさ。是迄は虚心平氣で、健全に論じてゐたが、一朝生活の逆流に觸るゝや、直に氣は挫けて落膽に沈んで了つた……意氣地が無い……人間は意氣地が無いもので、貴方とても猶且然うでせう、貴方などは、才智は勝れ、高潔ではあり、母の乳と共に高尚な感情を吸込まれた方ですが、實際の生活に入るや否、直に疲れて病氣になつて了はれたです。實に人は微弱なものだ。』

彼には悲愴の感の外に、未だ一種の心細き感じが、殊に日

暮ぐれよりかけて、しみりと身に泌しみみて覺おぼえた。是これは麥酒ビールと、莨たばことが、欲ほしいので有あつたと彼かれも終つひに心着こころづく。

『私わたしは此處ここから出でて行ゆきますよ、君きみ。』と、彼かれはイワン、デミトリチに怍かう云いふた。『此こゝへ燈あかりを持もつて來くるやうに言い付ひけますから……奈何どうして這こんな麼ま眞暗まつくらな所ところにゐられませう……我慢がまん爲し切きれません。』

アンドレイ、エヒミチは戸口とぐちの所ところに進すすんで、戸とを開あけた。するとニキタが躍をどり上あがつて來きて、其前そのまへに立たち塞ふさる。

『何方どちらへ！ 可いけません、可いけません！』と、彼かれは※さけぶ。『もう眠ねる時ときですぞ！』

『いや些ちと庭にはを歩あるいて來くるのだ。』と、アンドレイ、エヒミチは

怖々する。

『可けません、可けません！』

那樣事を爲せても可いとは誰か

とも言付かりません。御存じでせう。』

云ふなりニキタは戸をぱたり。而して背を閉めた戸に當てゝ猶

は其所に仁王立。

『然し俺が出たつて其れが爲に誰が何と云ふ。』アンドレイ、エ

ヒミチは肩を縮る。『譯が分らん、おいニキタ俺は出なければな

らんのだ！』彼の聲は顫へる。『用が有るのだ！』

『規律を亂す事は出来ません、可けません！』とニキタは諭すや

うな調子。

『何だと畜生！』と、此時イワン、デミトリチは急にむツ

くりと起おきある。『何なんで彼奴きやつが出ださんと云いふ法はふがある、我々われを

此こゝに閉込とちこめて置おく譯わけは無ない。法律はふりつに照てらも明あ白きだ、何人なにびと

と雖いへども、裁判さいばんもなさいくして無暗むやみに人ひとの自由じいうを奪うふ事ことが出来るものか

！ 不埒ふらちだ！ 壓制あつせいだ！』

『勿論もちろん不埒ふらちですとも。』アンドレイ、エヒミチはイワン、デミ

トリチの加勢かせいに頓とみに力ちからを得えて、氣きが強つよくなり。『俺おれは用ようが有あるの

だ！ 出でるのだ！ 貴様きさまに何なんの權利けんりが有ある！ 出だせと云いつたら出だ

せ！』

『解わかつたか馬鹿野郎ばかやろう！』と、イワン、デミトリチは※さけんで、拳こぶしを

固かためて戸とを敲たたく。『やい開あけろ！ 開あけろ！ 開あけんか！ 開あけ

んなら戸とを打破ぶちこはすぞ！ 人非人ひとでなし！ 野獸けだもの！』

『開あける！』アンドレイ、エヒミチは全身ぜんしんをぶる／＼と顫ふるはして。
『俺おれが命めいずるのだツ！』

『もう一度どい言いつて見みろ！』戸との那裏むかふでニキタの聲こゑ。『もう一度どい言いつて見みろ！』

『ぢや、エウゲニイ、フエオドロ牛うしチでも此處こゝへ呼よんで來こい、些ちよつと俺おれが來きて呉くれツて云いつて居ゐると然さう云いへ……些ちよつとで可いからツて！』

『明日あしたになればお出いでになります。』

『何日いつになつたつて我々われくを決けつして出だすものか。』イワン、デミ

トリチは云いふ、『我々われくを茲こゝで腐くさらして了しまふ料簡れうけんだらう！來らいせい世せいに地獄ぢごくがなくて爲なるものか、這麼人非人共こんなひとでなしどもが如何どうして許ゆるさ

れる、そんなこと 那樣事で正義は何處にある、えい、開けろ、ちくしやう 畜生！』
 彼はかれしやが 嗔れた聲を絞つて、戸に身を投掛け。『可いか、きさま 貴様の頭を
たゝ 敲き破るぞ！ ひとごろしめ 人殺奴！』

ニキタはぱつと戸を開けるより、阿修羅王の荒れたる如く、兩
やうて 手と膝でアンドレイ、エヒミチを突飛し、骨も碎けよと其
つけん 鐵拳を眞向に、したゝ 健か彼の顔を敲き据ゑた。アンドレイ、エヒ
 ミチはアツと云つたまゝ、みどりいろ 緑色の大浪が頭から打被さつ
 たやうに感じて、ねだい 寢臺の上に引いて行かれたやうな心地。口の中
 にはしほけ 鹽氣を覺えた、おほかたは 大方齒からの出しゅつけつ 血であらう。彼は泳が
 んと爲るものゝやうに兩手を動かして、誰やらの寢臺にやう／
とりすが 取また 縫つた。と又も此時このとき 振下したニキタの第二の鐵拳、

せぼね ゆが 背骨も歪むかと悶ゆる暇もなく打續て、又々三度目の鐵拳。

イワン、デミトリチは此時高く※聲。彼も打たれたのであらう。

其れよりは室内復音もなく、ひっそりと靜り返つた。折から

あはく つきひかり 淡々しい月の光、鐵窓を洩れて、床の上に網に似たる如き墨

畫を夢のやうに浮出したのは、謂ふやうなく、凄絶又慘絶の

極で有つた、アンドレイ、エヒミチは横たはつた儘、未だ息を殺

して、身を縮めて、もう一度打たれはせぬかと待構へてゐる。と、

たちまおほ むね 忽ち覺ゆる胸の苦痛、腸の疼痛、誰か鋭き鎌を以て、刳るには

あらぬかと思はるゝ程、彼は枕に強攫み着き、きりゝと齒をば切

る。今ぞ初めて彼は知る。其有耶無耶になつた腦裏に、猶朧朦氣

に見^みた、月^{つき}の光^{ひかり}に輝^{てら}し出^だされたる、黒^{くろ}い影^{かげ}のやうな此^この室^{へや}の一人^{ひと}
 々[〃]こそ、何^{なん}年^{ねん}と云^いふ事^{こと}は無^なく、恚^{いか}る憂^う目^めに遭^あはされつゝ有^あり
 しかと、堪^たへ難^{がた}き恐^{おそ}しきは電^{いなづま}の如^{ごと}く心^{こころ}の中^{うち}に閃^{ひらめ}き渡^{わた}つて、二十有^い
 うよねんあひだどうじぶんこれしかりしか、知^しらんとは爲^せざ
 餘^よ年の間^{あひだ}、奈何^{どう}して自分^{じぶん}は是^{これ}を知らざりしか、又^{また}剛^{がう}情^{じやう}我^が慢^{まん}なる其^{その}り
 しか。と空^そ恐^{おそ}しく思^{おも}ふので有^あつたが、又^{また}剛^{がう}情^{じやう}我^が慢^{まん}なる其^{その}り
 良心^{やうしん}は、とは云^いへ自^{みづか}らは未^{いま}だ嘗^{かつ}て疼^{とう}痛^{つう}の考^{かん}へにだにも知^しら
 ぬので有^あつた、然^{しか}らば自分^{じぶん}が悪^{わる}いのでは無^ないのであると囁^{ささ}いて、
 さながらえりもとひやみづあかん彼は起^{おき}上^{あが}
 宛^{さながら}然^{しか}襟^{えり}下^{もと}から冷水^{ひやみづ}を浴^あびせられたやうに感^{かん}じた。彼^{かれ}は起^{おき}上^{あが}
 つて聲^{こゑ}限^{かぎ}りに※^{さけ}び、而^{さう}して此^{こゝ}より拔^ぬけ出^いでて、ニキタを眞^ま先^{さき}に、
 ハバトフ、會^{くわい}計^{けい}、代^{だい}診^{しん}を麁^{みな}殺^{ころ}しにして、自分^{じぶん}も續^{つづ}いて自^じ
 殺^{さつ}して終^{しま}はうと思^{おも}ふた。が、奈何^{どう}したのか聲^{こゑ}は咽^{のど}喉^いから出^いでず、

あしまたいごとうご
 足も亦意の如く動かぬ、息さへ塞つて了ひさうに覺ゆる甲斐なさ。
 かれくる
 彼は苦しさに胸の邊を搔きまじり、病院服も、シヤツも、ぴり
 ひきさ
 くくと引裂くので有つたが、施て其儘氣絶して寐臺の上に倒れ
 しま
 て了つた。

(十九)

よくてかれはげ
 翌朝彼は激しき頭痛を覺えて、兩耳は鳴り、全身には只
 なやみかん
 ならぬ惱を感じた。而して昨日の身に受けた出來事を思ひ出して
 はづか
 も、恥しくも何とも感ぜぬ。昨日の小膽で有つた事も、月さへ
 きみわる
 も氣味悪く見た事も、以前には思ひもしなかつた感情や、思

想を有の儘に吐露したこと、即ち哲學をしてゐる丁斑魚の不滿足の事を云ふた事なども、今は彼に取つて何でもなかつた。

彼は食はず、飲まず、動きもせず、横になつて黙してゐた。

『あゝもう何も彼もない、誰にも返答などするものか……もう奈何でも可い。』と、彼は考へてゐた。

中食後ミハイル、アウエリヤヌチは茶を四半斤と、マルメラドを一斤持參つて、彼の所に見舞に來た。續いてダリユシカも來、何とも云へぬ悲しそうな顔をして、一時間も旦那の寢臺の傍に凝と立た儘で、其れからハバトフもブローミウム加里の壘を持つて、猶且見舞に來たのである。而して室内に何か香を薫ゆらすやうにとニキタに命じて立去つた。

其その夕ゆふ方がた、俄がぜん然ぜんアンドレイ、エヒミチは腦なう充じゆう血けつを起おこして死し

去きよして了しまつた。初はじめ彼かれは寒さむ氣けを身みに覺おぼえ、吐はき氣けを催もよほして、異い樣やうな

心こゝち地あ惡あくしさが指ゆび先さきに迄まで染しみ渡わたると、何なにか胃ゐから頭あたまに突つき上あげて來く

る、而さうして眼めや耳みみに掩おほひ被かぶさるやうな氣きがする。青あをい光ひかりが眼めに閃ち

付らつく。彼かれは今いま已すでに其その身みの死し期きに迫せまつたのを知しつて、イワン、デミ

トリチや、ミハイル、アウエリヤ又また中おほくチや、又また多ひと數れいの人の靈れい魂こん不ふ

死ふしを信しんじてゐるのを思おもひ出だし、若もし那そんな樣こと事あが有あつたらばと考かんへ

たが、靈れい魂こんの不ふ死しは、何なにやら彼かれには望のぞましくなかつた。而さうして

其その考かんへは唯ただ一しゆん瞬かん間かんにして消きえた。昨きのふ日よ讀よんだ書し中ちゆうの

美うつくしい鹿しかの群むれが、自じ分ぶんの側そばを通とほつて行いつたやうに彼かれには見みえた。

此この度どは農こゝやく婦しやうが手てんに書か留きとめの郵いう便びんを持もつて、其それを自じ分ぶんに突つき出だし

た。何かミハイル、アウエリヤヌキチが云ふたので有るが、直に
 みかききしま
 皆搔消えて了つた。恚くてアンドレイ、エヒミチは永劫覺めぬ
 ねむり
 眠には就いた。

げなんども
 下男共は來て、彼の手足を捉り、小聖堂に運び去つたが、彼
 めいまめい
 が眼未だ瞑せずして、死骸は臺の上に横臥つてゐる。夜に入つ
 つき
 て月は影暗く彼を輝した。翌朝セルゲイ、セルゲキチは此に來
 ねつしん
 て、熱心に十字架に向つて祈祷を捧げ、自分等が前の院長
 ひと
 たりし人の眼を合はしたので有つた。

いちにちへ
 一日を経て、アンドレイ、エヒミチは埋葬された。其の祈
 しきあづか
 禱式に預つたのは、唯ミハイル、アウエリヤヌキチと、ダリユ
 シカとで。

青空文庫情報

底本：「明治文學全集 82 明治女流文學集（二）」筑摩書房

1965（昭和40）年12月10日発行

1989（平成元）年2月20日初版第5刷

底本の親本：「露國文豪 チエホフ傑作集」獅子吼書房

1908（明治41）年10月

初出：「文藝界」

1906（明治39）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「匆」と※「#「勺／夕」、第3水準1-14-76]」、「拔」と
「※「#「抜」の「友」に代えて「ノ／友]」、「舞蹈」と
「舞蹈」、「理窟」と「理屈」の混在、仮名表記と繰り返し記号
の使い方の揺れは、底本通りです。

入力：阿部哲也

校正：岩渕祐子

2006年9月11日作成

2010年12月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

六號室

アントン・チェホフ Anton Chekhov

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 瀬沼夏葉訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>